

= 「協育」事例集 =

# 教育の創造

～地域「協育」のススメ（第2巻）～



別府市から別府湾・高崎山を望む

大分大学高等教育開発センター

Center of Development and Research for Higher Education, Oita University

= 「協育」事例集 =

## 教育の創造～地域「協育」のススメ（第2巻）～の発刊にあたって

大分大学高等教育開発センター  
センター長 山 下 茂

昨年に引き続いで=「協育」事例集=教育の創造～地域『協育』のススメ（第2巻）～を発刊することができましたことに、関係各位に厚くお礼を申し上げます。多くの方々に投稿していただいた大分県内の各地域や学校での「子育てのための協働」の実践事例、大分大学高等教育開発センター（以下「本センター」という）が育成するNPO法人大分県「協育」アドバイザーネット及び大分県「協育」ネットワーク協議会の会員の活動事例、更に、大分県教育委員会の取り組みにつきましても掲載させていただくことができました。こうした様々な取り組みの事例・情報に併せて、本センターが取り組んでいる「教育の協働」を推進するモデル事業や指導者・リーダーの育成の取り組みを紹介することができました。

「教育の創造」という本事例集の題名につきましては、第1巻でも述べさせていただきましたが、戦後の教育改革によって日本の教育は大きく前進し、素晴らしい学校教育制度を確立してきました、まさに、日本流の「教育の創造」であったということになります。言い換えれば、「教育の創造」の中心は学校教育であり、そのことによる大きな成果をもたらしてきました。しかし、平成18年12月に改正された教育基本法から読み取れることの1つに、第13条に規定されたように関係者の協力（「教育の協働」）の大切さがあると言えます。

本センターでは、改正教育基本法の趣旨を踏まえ、平成20年度から教育の協働に関する調査研究と指導者の育成事業を実施してきました。更に本年度は、教育の協働を推進する基盤となる「コーディネート機能」に関する全国調査を行い、別途、報告書を作成したところです。調査研究と事例紹介は高等教育機関の重要な役割の1つであり、本センターの今後の指導者育成の取り組みに生かすとともに、教育行政や学校等の各種教育機関、地域で活躍する企業や各種NPO法人等の方々にご利用いただければ幸いです。

「地域総参加で子育てのまちづくり」は多くの地域でアドバルーンを挙げています。しかし、どうすれば「総参加が推進できるのかわからない」という悩みもよく聞きます。大分県教育委員会や各市町村教育委員会、NPO法人等の事例集等に併せてこの事例集を参考にしていただき、県内の行政・機関・学校・企業・地域住民、そして各種団体・グループのネットワークが進み、多くの地域の関係者のネットワークが広がることを願っています。「地域総参加で子育てのまちづくり」は始まったばかりですが、着実に広がり、定着していくことだと思います。しかし、それは子どもたちを育てる役割を担う大人の意識次第であり、そのための資料としてご活用いただければと思っています。

最後に、本事例集の作成に当たって資料をいただきました関係各位及び編集にご協力いただきましたNPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの方々に深く感謝申し上げ、発刊のご挨拶といたします。

平成25年3月

# 目 次

第1章 教育の創造～地域「協育」のススメ・その2～	1
*全国調査から*	
「プラットホームに求められるコーディネート機能」に関する提案	
第2章 大分県における「協育」の事例	7
第1節 県内の事例紹介	7
事例1 「みんなで学ぼう人権講座」	8
事例2 九重ふるさと自然学校「トキの里クラブ」事業	10
事例3 おやじに出来る子育てと学校支援を色々～親路（おやじ）の会～	11
事例4 「地域とともににある学校づくり玖珠中の提案」	13
第2節 NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの取り組み	16
実践1 幼児向け環境ワークショップ事業	16
実践2 平成24年度地域ネットワーク版協働型委託事業	18
実践3 「ゆい（結い）」人と本を結ぶ読書支援プロジェクト事業	22
実践4 高校生の自立支援プログラム実践事業	24
第3章 大分県における地域「協育」推進の取り組み	26
第1節 大分県教育委員会が進める「協育」ネットワークの取り組み	26
1 大分県内の「協育」ネットワークの状況等について	26
2 大分県立社会教育総合センター研修事業	28
3 大分県立社会教育総合センター九重青少年の家事業	29
第2節 大分大学高等教育開発センター関係の取り組み	33
主催事業：平成24年度「『協育』アドバイザー養成講座」の実施	
共催事業：第6回地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会の開催	
育成事業：大分大学高等教育開発センターが育成する団体	
1. NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットが目指すもの	33
2. 大分県「協育」ネットワーク協議会が目指すもの	39
3. 情報プラットフォーム（ホームページ）の役割	42
資料：ロゴマークの紹介	53

# 第1章 教育の創造～地域「協育」のススメ2～

\*全国調査から\*

「プラットホームに求められるコーディネート機能」に関する提案

中川忠宣（大分大学高等教育開発センター教授）

## はじめに

教育基本法第13条の規定をふまえ、平成23年度からは学校と地域との連携・協力体制づくりに関する各種事業が一体化された「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」として再構築（以下「教育支援活動」という。）されるとともに、教育の協働の取組に関する文部科学省の顕彰事業も始まりました。こうした施策の中で今、組織としてのコーディネート機能の重要性が注目されており、筆者達は、平成20年度から平成22年度の3年間（3回）にわたる調査研究を基にした「教育の協働を推進するためのコーディネート機能に関する仮説」を昨年度末に提言しました。さらに、この仮説の検証を主な目的として、文部科学大臣表彰を受賞した全国の優れた取組に関する調査から見えるコーディネート機能のあり方に関して調査し、全国の地域での「協育」を推進するための1つの「物差し（スケール）」を提案したいと考えています。

### 【調査対象】

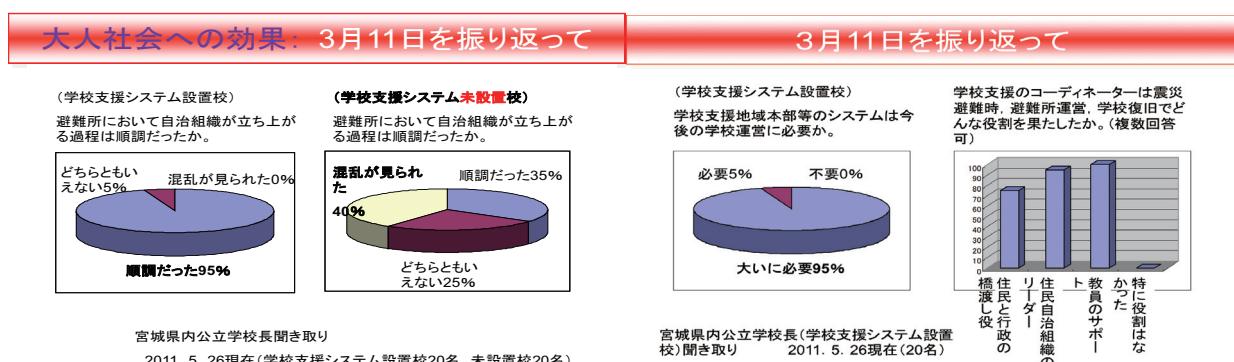
平成23年度学校支援及び放課後子どもプラン等の文部科学大臣表彰を受賞した全国の市区町村（以下「全国」という。）、及びその事業を実施している機関等（以下「機関等」という。）の117機関と、先進的な取り組みとして紹介されている仙台市の聞き取り

※引用した大分県のサンプル（事業を実施している全ての機関を対象）は、18市町村（全市町村）の教育支援活動を実施している85機関（3市は機関の回答無）。

## 1. 仙台市の取り組み

文部科学省のホームページや各種研修会で報告している、東日本大震災の大きな被害を受けた際の、各学校における対応に関する「学校支援地域本部事業」の効果（図1）の具体的な資料を収集するために、「学校支援地域本部事業」を実施してきた下記の3つの学校を訪問し、地域からの日常的な学校支援に関するシステム、効果、課題等を知ることができました。

図1 仙台市における震災と学校支援地域本部事業との関連（文部科学省調べ）



感じたことは「それは仙台だからできた」のではなく、「どこにでも可能である、そうした状況において対応することができるシステムを、その地域の実情を基にして、知恵と汗を出して作ってきたとい

うことを強く感じました。

右の時計は平成23年3月11日午後2時46分を示した名取市立閑上中学校の玄関正面にある時計です。本校は13人が犠牲になりましたが、現在は名取市立不二が丘小学校に仮移転して教育活動を行っています。その時から始まった地域の絆の重要性を、東日本だけでなく日本全国での「絆つくり」の取り組みへ広げていく大切さを感じました。

#### (1) 全体的な方針・取り組みについて

地域との連携がもたらす子どもへの効果としては主に以下にあると捉えて取り組んでいます。

- ①様々な立場の大人との関わりの中から多くのことを学ぶことができる。
- ②学校だけでは困難な教育を地域の力を借りて補完することができる。
- ③教師や保護者だけでは気づかない子ども一人一人の良さを地域住民に発見、認めてもらうことにより、多様な人との関わりの中で、様々な姿を自然に出せるようになる。

寺岡小学校においては、クラスの中で疎外されていた子どもがゲストティーチャーから認められ、「周囲の子どもの見る目が変わった」や「読み聞かせ活動をきっかけに不登校傾向にあった子どもが登校できるようになった」ということあったそうです。

#### 【コーディネーターに関するここと】

- コーディネート機能については、そのベースはかつての「地域子ども教室」（国補助事業）に関わっていたいただいたPTAや子ども会等の関係者の存在です。「地域子ども教室」が終了し、新たに始まつた現在の「放課後子ども教室」への移行期間に、この方たちを核にコーディネート機能を持たせたようです。基本的には、現在の学校支援地域本部は学校に拠点を置き、コーディネーター（以下、「CN」と表記）を複数配置するとともに、CNを統括するスーパーバイザー（以下、「SV」と表記）としてのCNを1名配置しています。
- 現在、「放課後子ども教室」の関係者（CN、子育てサークル関係者、放課後の子ども支援活動関係者）による任意団体が立ち上がっており、情報交換及びネットワーク化が進んでいることです。今後は、学校支援地域本部版の団体を立ち上げることも検討されているようです。

#### (2) 仙台市立学校の取り組み

##### ①仙台市立寺岡小学校における取り組み

- 自治会、PTA、学校、企業等の関係者で構成する地域教育協議会を設置して、方針や年間活動計画等の共通理解を図っています。加えて、「地域住民・地域団体」「企業・団体」「大学・教育機関等」「行政」ごとに期待される学校支援活動を例示し、協力を依頼しています。

○教職員の理解、意識に格差はあるようですが、徐々に意識が高まりつつあるそうです。教職員が地域からの教育活動支援に対して恩恵を感じることが大切であり、一方、教職員には、「子どもと関わる住民の姿は、一人一人の生涯学習の実践である」「職員一人一人が学校を地域に開くことへの自覚をもつ」ことなど、地域との連携の必要性を説いているそうです。

##### ②仙台市立西中田小学校における取り組み

- 平成16年度からの3か年で実施された「地域子ども教室」における「西中田コミュニティスクー



ル」実行委員会が母体となっています。同事業の終了後も、学校、家庭、地域の要望を受け実行委員会を継続し、現在は「西中田こみこみスクール」運営委員会として「放課後子ども教室」及び「学校支援地域本部」に取り組んでいます。学校支援活動は「学習支援」「環境整備」「防犯・交通安全」を柱として行っています。

○活動に必要な経費は国補助事業の予算から充てられている。併せて校区内の各世帯からの負担金（一世帯当たり50円）も活動資金に充てています。

○教職員は地域住民が学校に入ってくることが当たり前のことと捉えており、活動実績は学年毎に整理した上で、次年度に引継を行っているとのことです。

### ③仙台市立富沢中学校における取り組み

○平成21年度から学校支援地域本部（「サポーToかしわ」）を運営しており、父母教師会（PTA）と共同で学校支援活動を実施しています。学校支援地域本部の役員に父母教師会の代表が一名入っており、学校支援地域本部（地域）と父母教師会（保護者）との橋渡し役を担っています。

○これまでの地域からの支援に加え、生徒が地域に出て祭りや河川の清掃活動などの地域行事に参加する取組を行っています。夏休み期間中に、地域の祭りや環境整備活動、小学生のスポーツ指導補助等に延べ約390人の生徒が参加したそうです。生徒には活動への参加とともに、多くの大人と会話するように指導し、コミュニケーションの大切さを教えていました。地域との連携の重要性については、特に職場体験実習をとおして実感しており、実習終了後のアンケートで、今後身に付けたい力に対して「学力」を挙げる生徒が多いそうです。その理由については、「仕事に対する大人の『本気』を目の当たりにすることが考えられる」とのことでした。

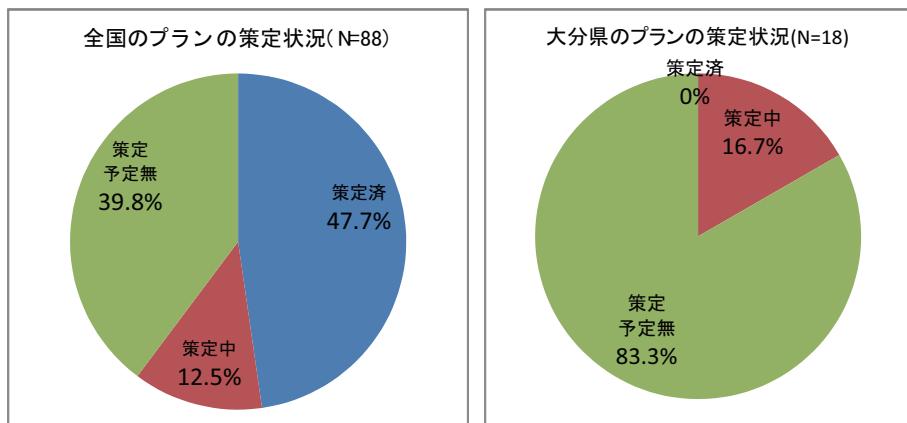
今回の聞き取り調査から仙台市内の先進的な取り組みのシステムは、学校支援活動と放課後子ども教室のCNの一元化を推進しており、改めて「一元化」の意味を考える資料となりました。コーディネート機能を一元化することは、事務局（プラットホーム）スタッフ一人一人がCNであるということを認識することや、重層的なコーディネートシステムの構築、情報の一元的集約・蓄積・提供が必要であり、こうしたことを推進するグランドデザインを描くことが行政の役割として重要であるということを知ることが出来ました。

## 2. 全国の優れた取り組み

### (1) 教育支援活動に関する基盤となる市（区町村）の機能

#### (1)-1 市（区町村）のプランの策定状況から見る

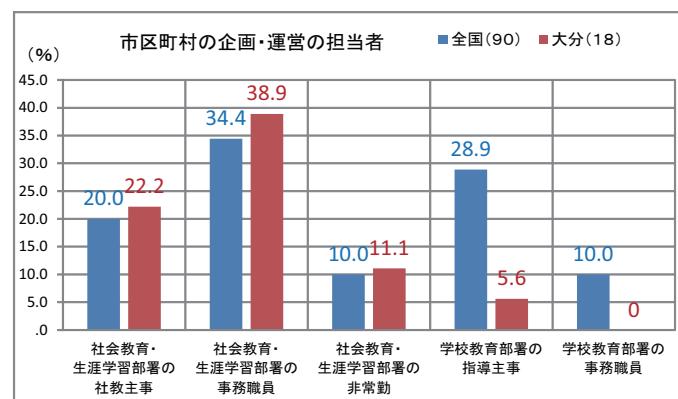
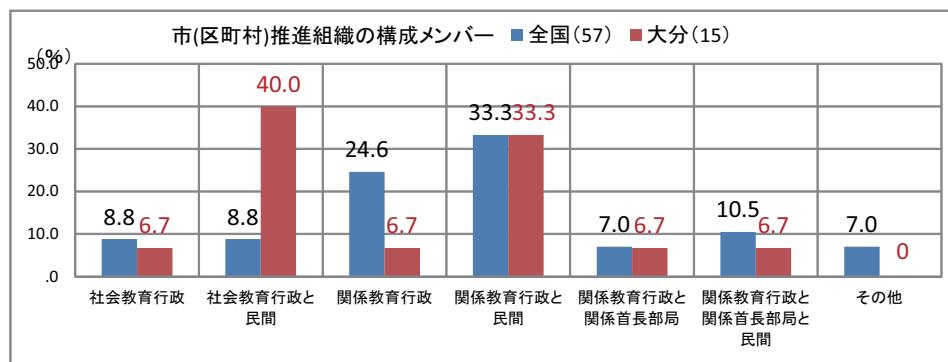
全国では47.7%の市（区町村）で策定しており、策定中を合わせて60.2%がプランがあるのに対して、大分県では1策定している市町村はありません。長期的な構想（プラン）の有無は、この取組を施策として実施しているのか、事業として実施しているのかの基本的な考え方の違いと捉えることができるのではないでしょうか。



## (1)-2 市(区町村)の推進組織の有無と構成メンバー・担当職員から見る

市(区町村)の推進組織は全国で64.8%で設置されており、大分県もほぼ同じです。上図は構成メンバー及び事業担当者を示しています。公民館活動として取り組んでいる大分県は、社会教育行政

関係者の割合が高いのに対して、全国では学校教育関係者の関わり大きいことがわかります。このことから、全国は求める側の学校からのニーズを取り入れるために学校教育関係者との協働体制による教育支援活動を推進していると考えられます。

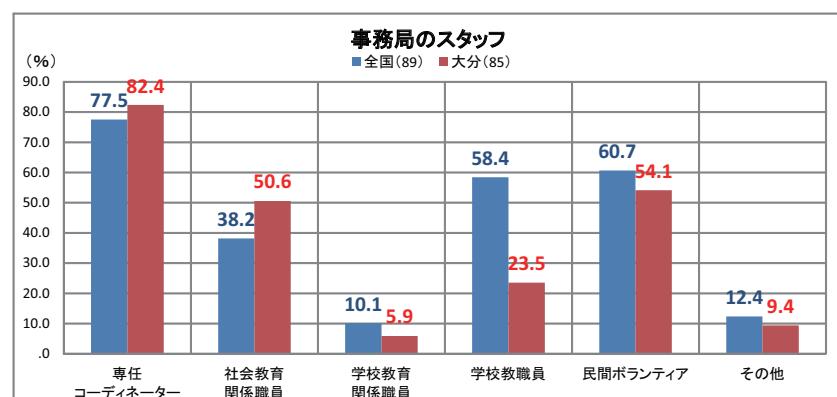
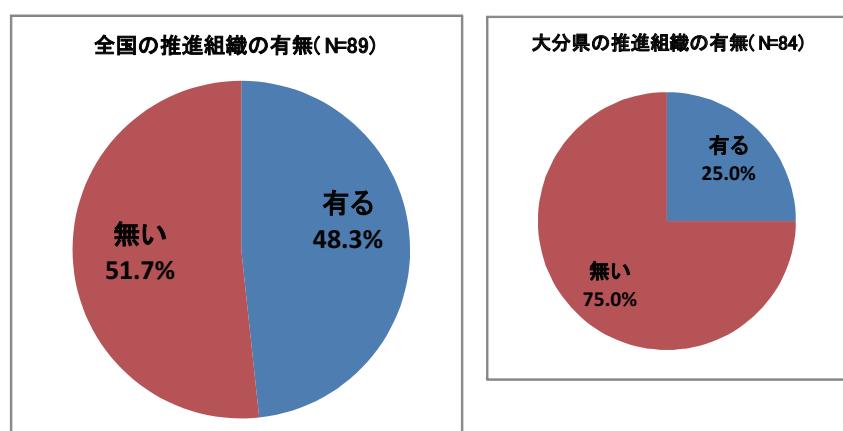


## (2) 機関等のコーディネート機能

### (2)-1 機関等における推進組織の有無と推進スタッフ

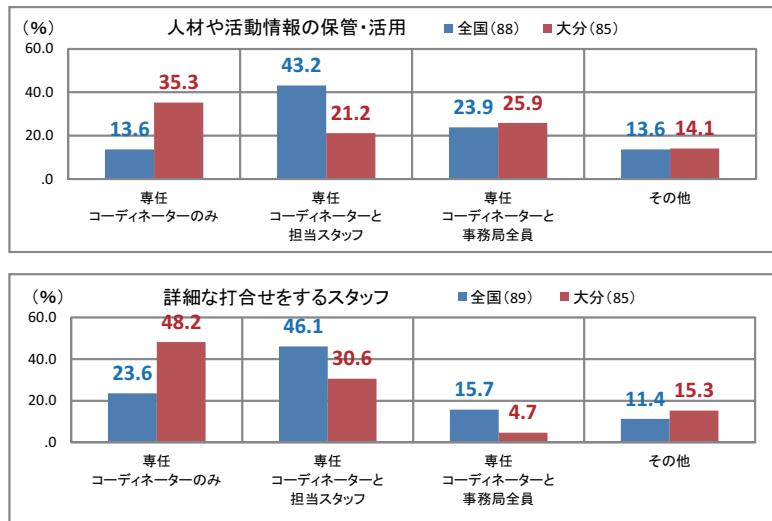
日常の教育支援活動を行う機関等での民間を加えた推進組織は全国では48.5%が設置しているのに対して、大分県では25.0%となっていることから、全国の各機関では組織的な取り組みが行われていると推測できます。

また、日常的な推進を行う事務局(プラットホーム)のスタッフは、全国でも大分でも、専任コーディネーター(全国: 77.5%、大分: 82.4%)で、ほとんどの機関等に専任コーディネーターを配置していることがわかります。更に、全国では民間ボランティア(60.7%)・教職員(58.4%)となっており、市(区町村)の状況と同様に、全国では教職員の関与が強くなっていることもわかります。



## (2)-2 日常のコーディネートのスタッフ

ニーズとシーズをマッチングするスタッフを示したものが右図です。上図は、地域の教育資源の収集・保管・活用をするスタッフを示したもので、全国では専任コーディネーターに職場等の担当スタッフを加えた体制が43.2%、事務局全員を加えた体制が23.9%で、専任コーディネーターのみは13.6%と非常に少なくなっています。下図は、支援活動のための打ち合わせをするスタッフを示したもので、情報の保管・活用と同じ傾向です。この2つの図から、大分県と比較して、「全国はスタッフ体制」でのコーディネート機能（プラットホームとしての機能）であると見ることが出来るでしょう。



## (2)-3 コーディネート機能の充実方策

右図は教育支援のプラットホームとして機能を充実させる取り組みを示したものです。全国も大分県でも最も多いのが、情報収集・保管等のシステムやそのための機器等の整備（55.7%）です。コーディネートするために最も重要なことが「情報」であるということがわかります。その情報を活用してプラットホーム機能を果たすのは「スタッフのコーディネート力の向上」（55.7%）、「スタッフ体制の整備」（45.5%）と、「プラットホームのスタッフ」の充実を挙げていることが全国の特徴としてあげられます。

### おわりに

#### =全国の優れた取り組みから=

全国の先進的な取り組みには一定のコーディネートシステムが存在し、それに沿ったコーディネートを行っていること、さらに、それを推進するためのスタッフの力量や体制が重要であるということがわかりました。こうしたことから、全国の優れた取り組み、大分県の取り組み等の整理・分析・考察から「学校支援のためのコーディネート機能を発揮する事務局（プラットホーム）の役割」について次のようにまとめます。

#### (1) 市区町村の推進体制（全国の優れた取組から見る）

- ①プランの策定など、施策としての広域的・長期的な取り組みを行っていること
- ②推進プランを基盤に置いた啓発・研修、スタッフ体制等の人的（資質等含む）整備等の具体的な取り組みを施策として行っていること
- ③社会教育のみならず、学校教育も含めた取り組みが行われているということ

#### (2) 仮説の検証（全国の優れた取組から見る）

##### ①事務局（プラットホーム）体制に関すること

- 専任コーディネーターの複数配置や単独学校での取り組みなど、専任コーディネーターに加え、社会教育関係に過度に頼らず、教職員や学校教育関係者、その他の人材もスタッフとなっています。
- ②事務局（プラットホーム）の住民との繋がりに関すること

コーディネート機能を充実させるためには「情報収集・蓄積・活用等のシステム」が重要であり、事務局としての有効な広報媒体の活用やスタッフによる口コミを積極的におこなっていることがわかりました。

#### =全国から見た大分県の特色=

全国のデータは文部科学大臣表彰を受賞したトップのAレベルの取り組みのデータであり、大分県のデータはA～Cレベルの全ての取り組みのデータです。それを比較することにより文部科学大臣表彰を受賞した市（区町村）、及び機関等の優れた取り組みを洗い出しました、全国の優れた取り組みに匹敵にする市町村・校区組織の機関等で取り組みレベルのものが多いこと、大分県の取り組みの特色、更には、今後大分県の各市町村が学ぶべきこと等が見えてきました。

推進組織、事務局スタッフ、研修対象者等のデータから、大分県の特色は社会教育主導の傾向であることがわかりました。更に、事務局（プラットホーム）に関しては、公民館に専任コーディネータを配置している関係上、社会教育行政主導体制になっている広報や人材拡充、重点的な取り組みという特色が見えてきました。

この報告は、今後の推進方策に関する事務局（プラットホーム）の役割を考えるための1つの「物差し（スケール）」を提案するものです。現実は、地域の願い、人々の想い、地域の良さと課題、これまで培ってきた人の繋がり・・・様々な地域の状況によって異なります。それは「差」ではなく「特性」と考えます。地域の実態に沿って、子どものため、大人（社会）のための「教育の協働」の施策を拡充していただくことを願っています。次回の「調査報告V」は「優れた事務局（プラットホーム）の取り組みによる子どもや大人（社会）・学校への効果」を中心にして、提案のまとめにしたいと考えています。

## 第2章 大分県における「協育」の事例

### 第1節 県内の事例紹介

事例1 「みんなで学ぼう人権講座」

【報告】NPO法人 共に生きる理事長 江藤 裕子

事例2 九重ふるさと自然学校「トキの里クラブ」事業

～自然環境豊かなまちづくりのための未来の担い手育成～

九重ふるさと自然学校（運営：一般財団法人セブン-イレブン記念財団）

【報告】4期生 川野 智美

事例3 おやじに出来る子育てと学校支援を色々～親路（おやじ）の会～

【報告】3期生 上原 政道

事例4 地域とともにある学校づくり玖珠中の提案

「コミュニティ・スクールはより良い変化を生む地域の活性化の循環システム」

【報告】玖珠町立玖珠中学校 校長 梶原 敏明

### 第2節 NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの取り組み

実践1 幼児向け環境ワークショップ事業

【報告】1期生 加藤 俊一

実践2 平成24年度地域ネットワーク版協働型委託事業

「泉都協育プロジェクト事業」

【報告】プロジェクトリーダー 2期生 山本 美咲

実践3 「ゆい（結い）」人と本を結ぶ読書支援プロジェクト事業

【報告】2期生 佐藤真由美

実践4 高校生の自立支援プログラム実践事業

【報告】1期生 加藤 俊一

## 第1節 県内の事例紹介

### 事例1 「みんなで学ぼう人権講座」

【報告】NPO法人 共に生きる理事長 江藤 裕子

実情を知らないこと・現場を知らないことが差別・偏見に繋がることあります。

実情・現場に学び、ワークショップで気づいた事・感じた事を深め合い共有し、社会問題を認識することを目的にしました。

#### 第1回【子どもの人権】「いじめ」

講師 全国いじめ被害者の会 大沢 秀明氏

自分の子供がいじめから自殺したことから、教育現場、国の教育に対する方針そして裁判での大変さを体験を通して話していただきました。



#### 第2回【子どもの人権】「児童虐待」

講師 別府光の園 松永 忠氏

ゆっくり丁寧にお話になる松永先生に感動しました。

柔らかく語られる言葉は、参加者の皆様の心に届いたと思います。

生きるという事、愛すること、愛で繋がること、人間としての根源を示されたように感じました。

一人ひとりが自分らしく生きられる世の中なってほしいです。



#### 第3回【高齢者的人権】「悩まずにすむ終末期のために」

講師 尊厳死協会 麻生 宰氏

今回の企画は、私の父の終末期にあたり考えさせられた問題です。

尊厳死ということをテーマにしました。

終末期の昔と今の違い、安楽死と尊厳死の違いをわかり易くお話しして頂きました。生きることも難しいが、死ぬこともなかなか難しい。

生前の意思表示の大切さを考えさせられました。



#### 第4回【高齢者的人権】「高齢者の訪問看護に携わって」

講師 看護師 久保田 あゆこ氏

事例 1. ご家族の思いと力

介護される家族に状況

2. 胃ろう

それぞれの家族の決断

3. 子どもとペット

子ども、ペットに接し、笑顔に穏やかに



介護するとき、介護されるときお互いの意思表示を明確にしなければいろんなことで悩む。

みなさん、元気なうちにそのときのため、家族で話しあっておきましょう。

## 第5回【障害者の人権】「障害と向き合って」

講師 株式会社リフライ 河野 龍児氏

前半は、体験談どのように障害を受け入れたのか厳しい体験を自分のものとして受け入れどのようにして自信を取り戻したか語られました。私だったらどうかと自問自答しながら聞き入っていました。

後半は、国連「障害者の権利条約」・国内法・障がいのある人も安心して安全に暮らせる別府市条例（仮称）について語られました。

分かりやすく語られる内容は、素晴らしいものでした。



## 第6回【医療と人権】「薬害から学ぶ」

講師 おくすり研究会・薬剤師 矢野 忠則氏

日本の薬害、薬事法、安全対策、健康被害救済等々分かりやすくお話しいただきました。

薬害当事者の私の体験も語らせていただきました。

どうぞ、みなさま、私たちと一緒に考えてください。



## 第7回【人権について】「ともにいきる」

講師N P O法人大分研究所 加藤 千明氏

- ・あるがままの姿に折り合いをつけて生きるよりあるべき姿に挑む
- ・不可能の反対は、チャレンジ
- ・自由、平等、公平
- ・譲り合う、共に生きる

等々たくさんのヒントを頂ける講座になりました。



## 「明日をみんなで明るい日とするためにシンポジウム」

人権の根本は、自分が自分の人権を守っているかどうかが問われます。

自分らしく生きることの素晴らしさを感じ、気づくことを目的にしました。

### 第1部 体験から伝えたいこと（体験発表）

徳 田 靖 之 氏

河 野 龍 児 氏

久保田 あゆ子氏

### 第2部 パネルディスカッション

テーマ「自分らしく、共に生きる」

コーディネーター

キャリアカウンセラー 西 村 慶 治 氏

パネリスト 徳 田 靖 之 氏

河 野 龍 児 氏

久保田 あゆ子氏

気づき・勇気・感動・学びをたくさん頂いた会になりました。



## 事例2 九重ふるさと自然学校「トキの里クラブ」事業

～自然環境豊かなまちづくりのための未来の担い手育成～

九重ふるさと自然学校（運営：一般財団法人セブン-イレブン記念財団）

【報告】4期生 川野 智美

玖珠郡九重町飯田高原に「九重ふるさと自然学校」を開校して6年、「くじゅうの自然保護・保全」「トキもすめるほど自然豊かな里づくり」を柱として地域の野焼きへの参加や、自然共生型田んぼづくりの実践、環境学習プログラムの実施などの活動を行っています。その中の「トキの里クラブ」は九重町の子どもたちを対象に、自然環境豊かな九重の未来の担い手を育成する事業として実施しています。

### 1 事業の概要

「トキの里クラブ」は九重町内の小学4年生～中学2年生を対象とし、自然観察や生きものにも配慮した田んぼでのお米作りなど、年10回程度の活動を行っています。「トキ」という名前にはかつて日本の里山生態系のアンブレラ種であり、現在日本では野生絶滅に指定されているトキでさえも安心して生息できるほど豊かな環境を創造しよう、という思いがあります。活動にはNPO法人九重トキ夢プロジェクト21や、地元老人クラブ白鳥会の皆さんにも協力頂き、「豊かな自然環境」とともに「人と自然との関わり」を次世代へつなぐ活動を目指しています。また毎年8月には「トキこども大使」として希望者を募り、新潟県佐渡島を訪ねています。トキが暮らしてゆける条件や環境などについて学び、改めて自分たちの郷土である九重について考え、子どもたちの夢や誇りを育むことをねらいとしています。

＜平成24年度の活動＞

5月	春の野草で草木染め	野草から色を抽出して染物を実施
	苗取り、田植え	生きものにも配慮した田んぼづくり
6月	草原散策とちまきづくり	地域の素材（ヨシの葉等）で包むちまき作り
	田んぼの生きもの調べ	田んぼで採集した生物の観察、同定
7月	川の生きもの調べ	中止（豪雨災害のため）
9月	稻刈り	中止（台風のため）
10月	田んぼの生きもの調べ	稻刈り後の田んぼの生物採集、同定
	九重ふるさと祭り参加	活動のPR、採れたお米でポン菓子を出展
11月	野鳥の来る庭づくり	巣箱作りおよびドングリ等を用いた飾り付け
1月	バードウォッキング	冬期に見られる野鳥の観察



### 2 課題と今後の取り組みについて

平成19年の発足よりのべ62名の子どもたちが活動しています。継続率も高いのですが、中学生になると参加の減少が顕著です。他にも総合的な学習の時間で飯田小5年生に対し田んぼでの学習なども行っていますので、さらなる学校との連携でより多くの子どもたちと関わっていかなければと思います。これらの事業における目標は子どもたちが将来大人になり、自然環境豊かな九重のために何らかの形で関わっていることです。そのためには「人づくり」「環境づくり」と共に内外の人たちにとって魅力的な九重町となるような「地域づくり」が必要です。トキの里クラブ事業も含め、環境の分野からこれらに貢献できるよう今後も取り組んでいきたいと考えています。

### 事例3 おやじに出来る子育てと学校支援を色々 ～親路（おやじ）の会～

【報告】3期生 上原 政道

学校保護者の活動にPTAがありますが、ほとんどの活動が女性保護者の協力でなりたっています。しかし、機会があれば学校参加したいお父さんもいるのではないか、そんなお父さんの子育て参加と学校奉仕活動におやじの会があります。今回はおやじな活動にスポットを当ててみました。

#### 1 日出町立川崎小学校親路の会

速見郡日出町川崎小学校は全校生徒約380名の中規模な小学校です。ここに6年前に当時のPTA会長がお父さんの子育て参加と学校参加の機会を増やそうとおやじの会の立ち上げを提案しました。

立ち上げ初年度の参加人数は約20名と保護者280世帯では若干少なめでしたが子ども達の為に今おやじに出来る事をしたいと熱い思いのおやじが集まりました。

おやじと子ども達の交流、おやじに出来る子育てと学校支援を色々と考え、PTAとは別組織で運営する事で自由な活動と参加の強制を無くし、出来る人が出来る時に出来ることをスローガンに活動を始めました。

#### 2 主な活動とおやじの学校支援

- (1) 親子で糸ヶ浜海浜公園海岸の清掃活動 5月
- (2) ウッドクラフト体験 7月
- (3) おやじの学校農園の草刈 8月
- (4) おおいたおやじネットワークとの合同キャンプ 8月
- (5) 川崎地区ふるさと祭りのPTAサポート 12月
- (6) 親子餅つき大会 2月



##### 清掃活動の様子

- ① 海岸清掃をする事で子どもたちにゴミ問題を考えてもらいます！  
参加した子ども達はたくさんの漂流ゴミに驚いてこれからゴミをむやみにポイ捨てする事がなくなります。
- ② ウッドクラフト体験は福岡県豊前市の廃校（もみじ学舎）まで行って開催します。  
グルーガンを使い子ども達の好きなように作品を作らせます、子ども達は思い思いに子ども達ならではの感性で作品を作り上げていくんです。これらの作品は夏休みの工作にもなります！  
一度参加した子ども達はリピーターに、人気のイベントです。
- ③ 学校農園の草刈は夏休みの親子学校奉仕活動の前日におやじだけで行います、当日は子ども達のそばで草刈り機の使用は危険が伴うために前日の早朝におやじ部隊が刈っておきます。
- ④ おおいたおやじネットワークキャンプは隔年開催、子ども達同士の交流とおやじ達の情報交換、毎回糸ヶ浜海浜公園で開催してます。海水浴・すいか割り・宝さがしに肝試し、花火大会、夕食も親子ではんごう炊飯にカレーを作ります。ここで体験は子ども達を一回り成長させます！  
子ども達が寝た後はおやじタイム、各校のイベントの極意や情報交換、なにより子育談議に花を咲かせます。
- ⑤ 川崎地区ふるさと祭りPTAサポートはいつも頑張っている役員のお手伝い、おやじ達はゲームコーナーの運営を任せられます、一日中子ども達の笑顔がいっぱいのコーナー！  
会場の設営やお片付けも元気なおやじがサポートします。



川崎地区ふるさと祭りとおやじのゲームコーナー

⑥ 親子餅つき大会は子どもに昔ながらの杵と臼を使ってお餅をつかせると子ども達は大喜び！お土産のお餅は保護者にも喜ばれています。最近は市販のお餅や機械でついた餅ですから餅つきの大変さも体験してもらいます。

川崎小学校親路の会は会員同士のアイディアを生かした活動をしています。名称も昨年おやじの会から親路の会へ！これはおやじだけで無く女性や地域の人も入会してもらおうと考えました。親の路の会とする事で地域、家庭、学校も巻き込んで子ども達の健全育成を図るねらいです。

#### 活動写真



ウッドクラフト体験



おやじの会合同キャンプ



親子餅つき大会

#### おわりに

平成23年度現在大分県内に小学校135校、中学校43校におやじの会が設立しています、これは全体の約40.1%になります。PTAに属した形や単独、地域やOBが参加している所と様々ですが、基本は子ども達の健やかな成長ではないでしょうか、おやじが率先して地域に飛び込みコミュニケーションを取ることで子ども達もバランスの取れたコミュニケーション術を学んでいきます。学校や地域は子ども達にとって小さな社会、その中で生きて行く術を学んでいきます。知識は先生に、知恵は家庭や地域の達人にこの三つが揃って協育。

県内はもとより全国にもたくさんのおやじの会があります。HPなどで検索してどんな活動をしているか見るだけでも何か子育てのヒントを見つける事が出来るかもしれません。

## 事例4 「地域とともにある学校づくり玖珠中の提案」

コミュニティ・スクールはより良い変化を生む

「地域の活性化の循環システム」

【報告】玖珠町立玖珠中学校 校長 梶原 敏明

### 1 コミュニティ・スクールとは

本校は平成23年10月12日に、保護者や地域住民、学識経験者、教職員14名を委員とする学校運営協議会を設置して、コミュニティ・スクールとしてのスタートを切りました。

コミュニティ・スクールとは、校内に「学校運営協議会」を設置して保護者や地域の皆さんのが一定の権限と責任をもって学校運営に参画することにより、そのニーズを迅速かつ的確に学校運営に反映させるとともに、学校・家庭・地域社会が一体となってよりよい教育の実現に取り組むことができるシステムです。

### 2 本校の現状と課題は

これまで、本校は学校が荒れ、生徒が落ち着いて授業を受ける環境ではなかった。このことが、学力・体力の低下の要因のひとつでした。

### 3 導入の目的と対策

全国学力・学習状況調査の報告でもあるように、子どもの学力は学習習慣や生活習慣との相関が高いことが明らかになっていきます。

#### (1) 「学習習慣」と「生活習慣」の改善

その対策として教育目標を→「あたりまえのことを、あたりまえにできる生徒の育成」 具体的な取り組みとして「①学習に励む②あいさつ・返事③清掃④服装」

☆これからの中学校は、生徒、保護者、地域住民の意見を尊重していくことが必要不可欠と考えています。学校は地域とともにあり、地域全体でつくりあげていく者であるという意識を共有し、教職員と家庭地域住民との「熟議」によるコミュニケーションのできる場所や機会を設ける仕組みをつくりました。このような機能をもつのがコミュニティ・スクールと考えております。

☆「学校だより」を活用して、保護者だけでなく、地域にも学校の教育活動状況などの情報の発信を積極的に行うようにしました。

☆保護者や地域の皆さんのが授業参観（オープンスクール）や教育活動に参加することが、学校、保護者・地域・生徒間のコミュニケーションの活性化に効果的と考え、積極的に推進しました。

☆学校全体で、家庭や地域に積極的に働きかけを行っていくことにしました。

☆子どもの学習習慣および生活習慣の改善を家庭・地域との連携・協力のもとに図っていくことを学力向上に関する目標の実現に向けた教育活動の全体構想としました。

#### (2) 学習指導と生徒指導の総合的推進

これも、全国学力・学習状況調査の結果によりますと、子どもの学力は学校生活の規律や家庭生活の充実と高い相関があるということです。

例えば、規律のある生活習慣が身についている子どもほど正答率が高い傾向にあり、学校のきまりや友達との約束を守るなど規範意識が高い子どもほど正答率が高い傾向が見られるなど、こう

した結果から、学習指導と生徒指導を連動させて総合的に取り組むことにしました。生徒や保護者からの学校評価を実施して、その結果を活用して、学習指導と生徒指導に関する本校の課題を明確化し、改善目標を焦点化して、「この子たちは今しかない」で取り組んできました。



また、外部人材を活用した「夢かけはし塾」(塾長は九州工業大学名誉教授)を校内に設置して、長期休業中やテスト前の補充授業、全ての数学、英語の習熟度別授業、朝自習(読書タイム)、放課後の全校一斉のドリルタイム、職員室質問コーナー、全教科で図書館活用調べ学習などに取り組んでいます。本校はそのような課題解決の取組のためのツールとして、コミュニティ・スクールを活用しました。



#### 4 導入のプロセス

導入にあたっては、まず、学校と地域の関係について、内部環境（学校の課題）と外部環境（地域の課題）の両面から現状分析し、課題を洗い出しました。

内部環境については、次のような課題が見えてきました。

- ・保護者や地域の様々な意見・要望（ニーズ）が学校に反映される仕組みが不十分。
- ・学校が閉鎖的で、地域に開かれ、信頼される学校づくりの取組が不足。
- ・地域は何らかの協力・支援をしたいが、その機会（仕組や方法）が不明確。

外部環境については、次のような課題が見えてきました。

- ・小学校は身近であったが、中学校は少し遠くなつた（敷居が高いなど）という保護者、地域住民の意識がある。
- ・子どもが在籍していたP T Aの時は学校に協力してきたが、卒業後は関心が薄ってきた。

これらの課題を解決するための手段として、コミュニティ・スクールを活用することを目指しました。その際に重視したのは人選でした。まず、学校運営協議会の会長には、自治会（玖珠地区コミュニティ運営協議会）の副会長をお願いしました。これにより自治会との密接な関係ができ、連携・協働で学校支援が得られる体制が整いました。

また、関係者の連絡調整等を「学校支援地域本部」の協育コーディネーターに依頼しました。これらにより、学校運営協議会が機能を発揮できる基盤が整いました。

#### 玖珠地区コミュニティ運営協議会役員と 玖珠中生徒会との意見交換会『住みたくなる町・誇れる町づくり』



#### 5 導入した成果

コミュニティ・スクールを導入した結果

##### (1) 教職員

教職員から積極的に地域人材の活用などの学校運営協議会への要請が出るようになり、行動的な組織

集団に育ってきています。

教職員の意識改革、学校の組織改革も進み、組織の中核となるミドルリーダーの学校運営への参画意識・当事者意識が高揚してきました。

#### (2) 保護者や地域住民

また、地域などの来校者が増加し、保護者や地域住民の建設的な要望が校長・学校運営協議会に提案されるなど、風通しのよい学校になってきました。

学校に何か協力したいと思っていた地域住民や保護者も、そのチャンスが生まれ積極的にかかわってくれています。

#### (3) 生徒

生徒は地域行事のお祭りなどで、地域の人たちとの交流や地域に貢献する活動を通じて、地域を知り、今まで知らなかつた地域の特性を深く理解することで、「地域への愛着心」や「地域への誇り」を高めることができてきています。

また、生徒自身が地域の一員であるとの自覚ができるとともに、地域行事等に企画段階から積極的に参加するのど、参画意識の高揚にもつながると考えています。

#### (4) 学校と地域との相互の交流

なお、地域住民も生徒と直接、ふれあい交流することで、学校理解が深まり、「私たちの学校」「おらが学校」という当事者意識が芽生えてきています。

☆学校は積極的に地域に貢献して地域をよくしていく“地域づくり活動”的一端を担っていると実感しました。本校の教育目標は「あたりまえのことを、あたりまえにできる生徒の育成」ですが、地域の方々から、「登下校時の挨拶や、服装、態度が良くなってきた。」との声が寄せられるなど、子どもたちにも変化が見られてきました。地域からいつも見られていること、地域から関心や期待を持たれていることを感じ、子どもの意識が変わってきたのだと頼もしくも思っています。

## 6 まとめ

コミュニティ・スクールを導入したこと、「学校が変われば、教師が変わり、子どもが変わる。子どもが変われば、保護者が変わる。また、地域が変わり、町が変わっていく」という「地域の活性化の循環システム」であることを実感しています。今後も、地域とともにある学校づくりに力を尽くしたいと思っています。



## 第2節 NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの取り組み

### 実践1 幼児向け環境ワークショップ事業

【報告】1期生 加藤 俊一

昨年の事例集で紹介した「富士見が丘幼稚園モデル事業（「子どもエコと読み聞かせのジョイントモデル事業」）』をノウハウに、「協育」普及関連プロジェクト事業として位置づけした幼児向け環境ワークショップ事業（大分県委託事業）を展開しました。

#### 1. 事業テーマ

主題：多様な環境体験プログラムを通した幼児期のエコ意識の醸成

副題：幼保施設における「協育」の模索



#### 2. 事業概要

(1) 対象場所大分県内幼稚園3か所（別府市、佐伯市、由布市）

(2) 事業期間平成24年9月～平成25年2月

(3) 事業体制

主催：NPO法人大分県協育アドバイザーネット

協力：大分県協育ネットワーク協議会会員



(4) プログラム内容

「富士見が丘幼稚園モデル事業」を通して得られた各種プログラムのノウハウの標準化をベースとし、新たなプログラムを創意工夫した年齢別プログラムを実施しました。

下記プログラムを3つの園が選び、それぞれの園が下記の表のプログラムを実施しました。

<基幹プログラム：1時間プログラム>

1号プログラム：自然素材とリサイクル素材のものづくり体験（3～5歳児）

2号プログラム：廃油利用のカラーろうそくづくりとキャンドルナイト（4～5歳児）

3号プログラム：廃材利用の「メモはさみキボッ」とづくり（4～5歳児）

4号プログラム：手づくりマラカスでリズム体操・エコ体操（3歳～5歳児）

<ジョイントプログラム：15分プログラム>基幹プログラムと組み合わせて実践

5号プログラム：読み聞かせとエコ題材の大型紙芝居（2歳～5歳児）

6号プログラム：エコ博士になろう。エコクイズとエコ学習（4歳～5歳児）

	1号	2号	3号	4号	5号	6号
別府市A保育園		○		○	○	○
佐伯市Y保育園	○	○		○	○	
由布市Y幼稚園	○	○	○			

<対象園児（受益者）>

別府市A保育園3歳～5歳児34名

佐伯市Y保育園4歳児33名

由布市Y幼稚園4歳児～5歳児91名

#### 3. 事業実践を通して

(1) 実践のフロー・サイクル

各園との基本的協議→園の希望にとりいれた事業計画書作成→主催者内部関係者全体会議

→3つの園との第2回事前協議→プログラム毎の事前協議（実行委員会）→各種準備

⇒当日実践⇒実績報告・評価→県への報告→「協育」としての完了報告

## (2) 「協育」について

各園とも「協育」地域ネットワークづくりの現実的な困難さから期待も無く、幼保施設に対する「地域の協育」が存在しないことを、富士見が丘幼稚園同様の認識をすることになりました。園とのヒト、モノの協働関係が「小さな協育」なのだろうかという思いです。

## (3) プログラム実践の評価

①プログラムの総合点 ②園の教師の声・反省・課題

③主催者と園との協働の評価

④プログラムの評価と課題 ⑤子どもの声・つぶやき

⑥園長のコメント ⑦「協育」としての捉え

の7点について、プログラム毎にシート化して、その概略を紹介します。



◆プログラムの総合点：5段階評価60p～80p=1件、81p～100p=8件⇒「成功」

◆主催者と園との協働：全てのプログラムで定型・定量な打ち合わせを実施→双方に反省点が無い評価で、ほぼ満点の評価

◆子どもの声・つぶやき：エコとのふれあいが感動の言葉で表れていて、充実感をもらった。

・保護者と一緒に作業できるのが楽しく「うれしい、すごいねー、きれいだねー」

・クレパスを溶かす時「わー、きれい！」の喚声があがり、私たち教師も感激した

・「また、かっこいいものを作るぞ～」などなど

## (4) 「協育」の捉えとして、スタッフが書いたこと

・園+保護者+主催者+子ども同志の関わりができた。

・親子の作業を役割分担することで、「順番」の意識づけができた。

・先生も楽しめ、コミュニケーションができた。

・園の準備は、大変だったと思う。大変感謝しています。

・にわか仕立ての助手だったので、N P Oとして確固とした体制や事前学習が必要と感じました。

・子どもとのふれあいに心があったか、全力投球したか、などの振り返りが必要です。



## 4. 今後について

大分県の事業委託の期待に沿った結果で完了しました。携わったスタッフ間の「協働」に敬意と謝を表し、3つの園との絆と実践を通じて得た新しいノウハウの蓄積に感謝します。この事業は、来年度も継続されるようですが、さらなるプログラム標準整備を行い、幼児期の教育に関わる大人の「協働関係（共育）」づくりを促進していきたいと考えます。



## 実践2 平成24年度地域ネットワーク版協働型委託事業

「泉都協育プロジェクト事業」

【報告】プロジェクトリーダー 2期生 山本 美咲

私たちは、平成23年度に朝日中学校に大分大学の学生に来ていただきて「楽習会」を始め、それがきっかけで、地域の力を借りて学校支援をする取り組みが始まりました。本年度、大分県「平成24年度地域ネットワーク版協働型委託事業」(提案公募型)を受け、別府市内的一部の学校をモデルとし、PTAが取り組む「子どもたちの学校支援・学校すきま支援」を通して、地域の教育力の発掘及び組織化を図るとともに、市内における協育ネットワークを構築することを目的とした事業を行いました。その1つは、PTAが取り組む、子どもの教育活動への地域からの支援です。さらに、こうした学校支援に関する意識を知るために市内の教職員へのアンケートを行って、今後の学校支援の方向性を検討することとしました。(詳細は、「泉都協育プロジェクト事業」の報告書に掲載していますのでお問い合わせください。)

### 1. 各PTAの取り組み

朝日中学校では、夏休み期間中の登校日・行事日を除いた平日に保護者や地域の方が見守り隊として、「夏休み自習教室」を開きました。今回は、本委託事業を通してつながりのできた退職校長会の協力も得ることができました。体験活動と地域との関わりのきっかけとして開催されている「朝日村フェスタ」では、様々な地域住民の協力のもと「こども屋台」の運営や「読み聞かせ」などの支援を行うとともに、さらなる地域の教育力の発掘をもとめ、「学校支援隊」の募集活動も行いました。

また、石垣小学校では、地域住民との連携による夏休み中の学習支援を行い、緑ヶ丘小学校では、授業の5・6時間目を使い2クラス合同の親子レクリエーションで、象書でカレンダーブルを実施しました。今後は、今回できたネットワークを基盤において、別府市が取り組んでいる学校支援地域本部事業と連携して、日常的な学校支援・放課後活動支援システムを作り、市内全域に広げた「協育」ネットワークづくりを進めていきたいと思っています。



朝日中学校「楽習会」・・・楽しい英語！楽しい数学！でした・・・。



朝日村フェスタ2012

## 2. 地域からの学校支援に関する教職員の意識調査

今回の別府プロジェクト事業で、学校教育活動への地域からの支援をおこないましたが、こうした学校支援に関して、教職員の意識を把握することも大切です。押しつけの学校支援や「してあげる」の学校支援は学校教育を混乱し、教職員の願いへの支援に繋がりません。今後、こうした取り組みを進めるための教職員の意識の傾向を把握するために、学校現場の教職員へアンケートに協力していただきました。一部の教職員の意識だけで学校の思いや願いを把握することはできませんが、あくまでも1つの傾向として整理することにしました。

以下、基本的な傾向を推測できる内容を整理して、今後、保護者・地域社会からの学校支援の観点を提案することとします。

※グラフ内の質問項目は、紙面の関係上、質問内容を要約して記述しています。

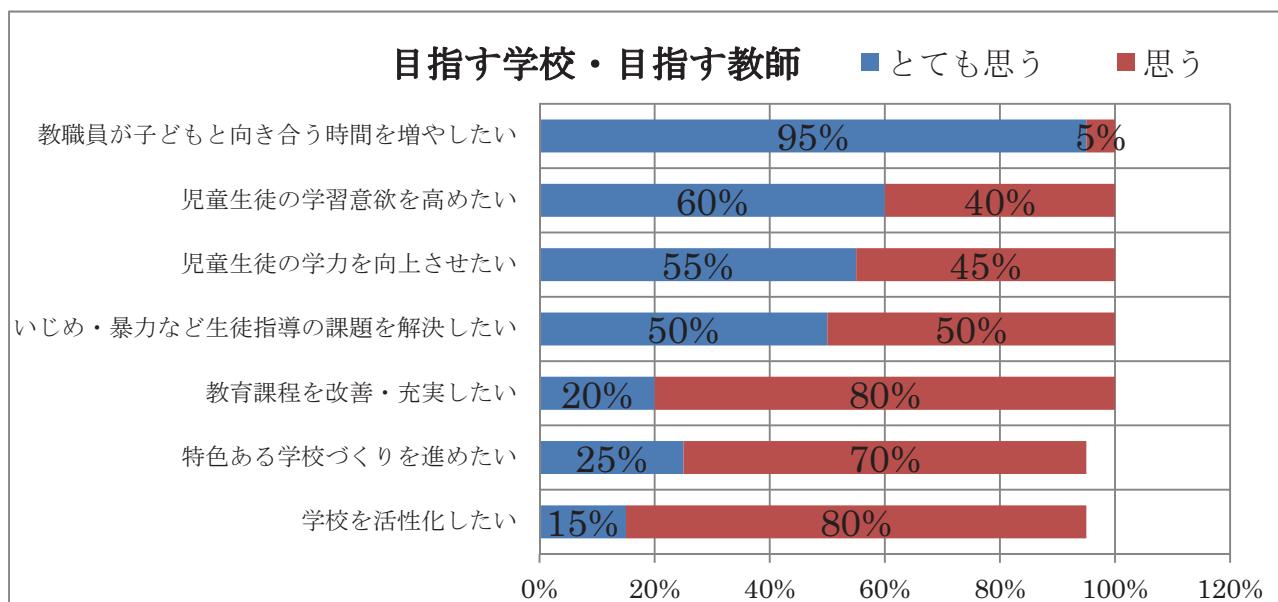
### (1) 学校教育活動の実践

まず、日常的な学校運営、教育活動をおこなうための条件整備について質問し、教職員が目指す学校・教師の姿、保護者や地域への願いを整理することとしました。なお、この調査内容は、文部科学省が全国のコミュニティースクールを対象として実施したアンケートの一部を引用したものです。回答は「とても思う」「そう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4選択でお願いしました。

#### 1) 目指す学校、目指す教師について

勤務する学校において、目指す学校・教職員の姿についての質問です。個人というより、学校という組織の一員としての意識からの回答になっているようです。質問は10項目ありますが、9割以上の教職員が「とても思う」「そう思う」という肯定的な回答した項目をグラフで示したのが図1です。

図1 目指す学校、目指す教師について、当てはまる項目に○を付けてください



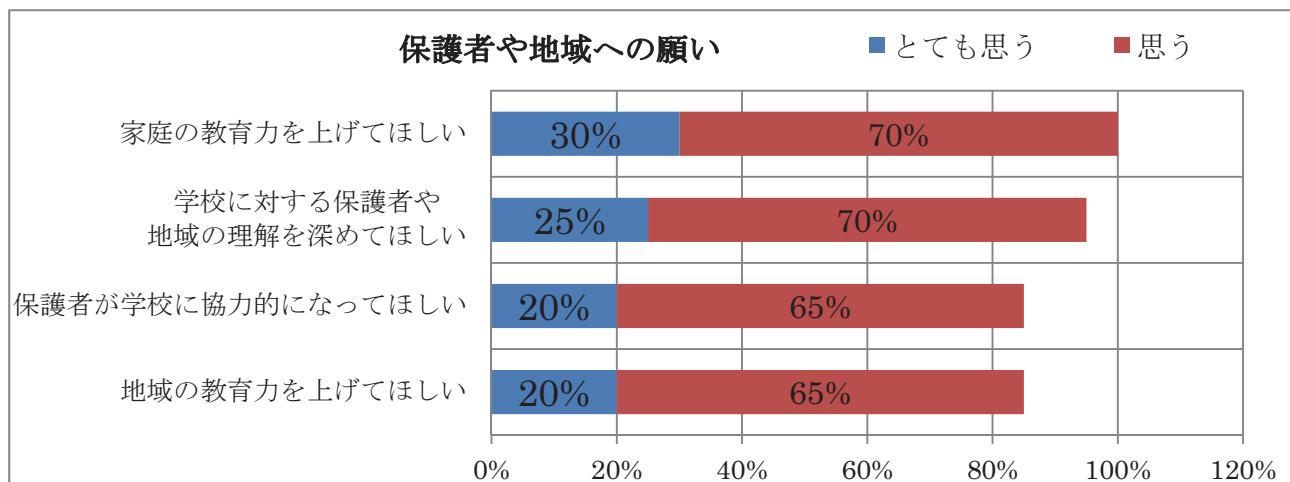
上記の結果が、「現在、課題であるから」ということだけでなく、「学校教育が本来すべきことを実現したい」という願いも見えてきます。この図から、一番教職員が望み、目指していることが「子どもと向かい合って、学力や学習意欲を向上することや、子どもたちの心に寄り添う生徒指導を日常的におこなう教育活動をしたい」ということがわかります。生徒指導の問題も大きな課題として抱えていることがわかります。また、学校経営や学校運営についても、子どもの教育活動の基盤づくりのために改

善・充実する必要があることも感じています。換言すれば、「不易」な教育活動をおこなうための条件整備と、現代的な課題に対応する「流行」としての教育活動の両面からの取り組みを求めていっていると言えるのではないでしょうか。

## 2) 保護者・地域への願いについて

現在の子どもたちの現状を見ると、多種多様な考えを持ち、生活環境も原因として考えられる様々な課題があります。しかし、こうした課題への対応を学校教育へ過度に依存しているという傾向も指摘されています。様々な子どもや保護者、地域住民の願いや課題を数人の教職員で担いきることには限界があります。教職員が、本来目指す学校、教育活動をおこなうためには、学校以外の生活環境の改善、保護者・住民の関わり等も重要です。せめて、学校教育のみで担いきることが必要でないと考えられることを整理して、子どものために相互が努力・協力していくことが重要であるということは、他の調査で明らかになっています。質問は7項目ありますが、保護者や地域へのこうした願いを8割以上の教職員が持っている項目をグラフで示したもの図2です。

図2 保護者や地域への願いについて当てはまる項目に○を付けてください



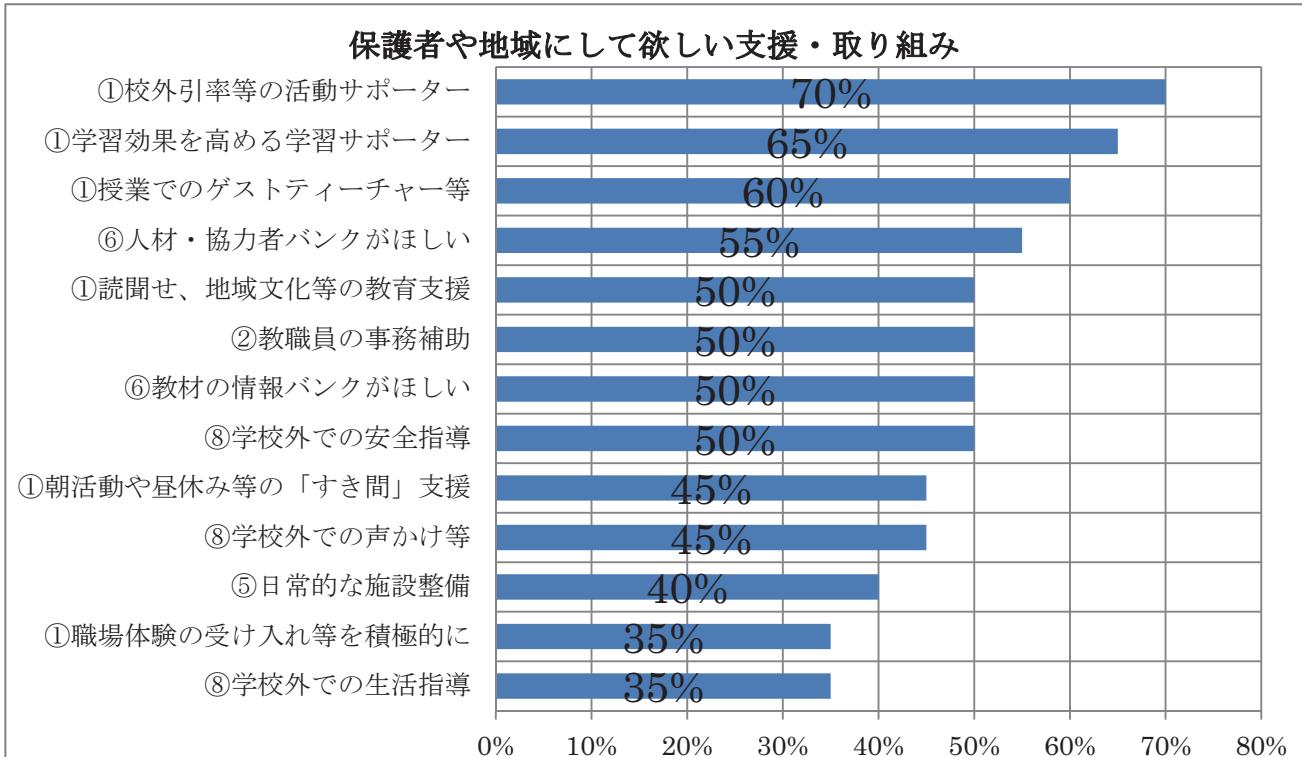
この結果は、大分大学高等教育開発センターが実施した、大分県内の教職員及び保護者・住民の意識調査と同じ傾向です。保護者の教育力の向上のみならず、地域の教育力を発揮して欲しいという願いが強いことがわかります。図1の「学力」「学習意欲」「学校外の生徒（生活）指導」など、学校のみの対応では限界があることを教職員は認識しているということです。問題は、保護者や地域が何をすればいいのか、それによって学校はどう変わり、子どもと向かい合った教育活動がどう可能になるのかを示す必要があります。そして、それを実行するシステムを整備することが重要です。それをしない限り、これまでの「過度な学校依存」は解消できないのでしょうか。

## (2) 学校教育活動へ求める地域からの支援

1で述べたように、過度な学校依存という現状において、様々な子どもが在籍する学校・学級で教職員が日常的に子どもに向かい合って指導し、学ぶ環境を作っていく方策を考えるために、教職員の願いを整理することとしました。「教育活動の充実のためにして欲しい地域からの支援」について調査したもので、調査内容は以下の8点です。なお、この内容と調査項目は、大分県教育委員会が平成19年に教職員を対象にした研修会においてKJ法を使って整理したもの一部を引用しました。

- ①学習活動支援
- ②学校活性化支援部
- ③活動（クラブ活動）支援
- ④保護者同士のネットワーク
- ⑤学校施設・環境整備地
- ⑥地域情報の提供
- ⑦学校が抱える課題対応
- ⑧地域住民による安全・安心な地域環境や子育て地域づくり

図3 教育活動の充実のためにして欲しい地域からの支援について右欄に○をつけてください



この図は、24の調査項目の中で、支援・関わって欲しいという回答の多かった上位半数をグラフで示しています。この図からわかるように、1で示した「子どもと向かい合って、子どもを育てたい」という思いと重なっていることがわかります。全ての内容が、子どもの力を付けるために、教職員だけでは限界があることばかりです。よく言われる「先生が楽をするため」の内容ではないことがわかります。

まず、「①学習活動への支援」が上位であり、多くの支援を多くの教職員が望んでいます。次に、②の学習活動を充実するための地域の人材・教材情報です。さらに、⑧の子どもの地域での安全や生活指導への関わりを願っていることがわかります。まさに、教職員だけではできない地域の人材、サポートが必要なことばかりです。なお、この図には示しませんでしたが「学校へのクレーム」や「給食費の滞納」などへの対応という課題も多くの教職員が抱えていることもわかりました。

### (3) まとめ

私たちは今回の調査で、教職員の本当の思いや願いに触れることができたような気がしていますが、本当はもっと深い思いがあることも感じました。これまでに日常的な学校支援のシステムや、子どもたちへの支援の効果などを十分に経験していない教職員がほとんどです。「教職員」という立場上「まずは、自分たちがしなければ・・・」という使命感と、「子どもたちのためには、保護者にもお願いしたいことが・・・」という保護者や住民への願いの間に立って悩んでいるのであろうということも見えてきました。「こんなことを保護者や地域にお願いできない。してはいけない。」という思いと、目指す学校の姿、日常的な教育活動とのことで、これからどうすればいいのか、どうしなければならないのかを悩んでいる学校現場について、みんなで考えるきっかけとなりました。

アンケートに協力いただきました先生方、本当にありがとうございました。

(意識調査の文責：大分大学高等教育開発センター教授中川忠宣)

# 実践3 「ゆい（結い）」人と本を結ぶ読書支援プロジェクト事業

【報告】2期生 佐藤 真由美

「読み聞かせプロジェクト」という名称でスタートしましたが、子どもたちと本とに関わっていく上で「読み聞かせ」だけでなく、読書全般において支援、活動をしていきたいと考え、名称を一般募集しました。そして、昨年5月の総会で「ゆい（結い）」（人と本を結ぶ読書支援プロジェクト）と名称を改めました。沖縄に「ゆいまーる」という言葉があるそうです。「ゆい」は「結い」結合=共同=協働、「まーる」は、順番です。その根底には「誰もが、互いに信頼し合い、心から支え合う社会に向けて、ひとりひとりがちいさな力を出し合い、連携し合って歩んでいく」があります。これは「協育」アドバイザーのメンバーひとりひとりの想いでもあるのではないかと思いました。そして、読書支援プロジェクトに携わる者の想い「子どもたち（人）と本を結ぶ」「本を通して、人と人とを結ぶ」「そのつながりの輪を広げる」をこの言葉に託したいと思い選定し、新たな気持ちで活動を進めています。以下、今年度の様々な活動を報告します。

## 1. パパ！出番です！！「育メン読み聞かせ講座」

～「大分市あなたが支える市民活動応援事業」の補助金をうけての事業～

近年、父親の育児参加が求められ、父親たちも育児に積極的に取り組もうとする動きになってきています。そのような中、父親が取り組める育児のひとつとして、絵本や童話の読み聞かせを薦めたいと思いました。お子さんにとって、いちばん身近な人である父親や母親の声による読み聞かせは、人を信頼する心や愛される喜びなど、人としての豊かな心の基礎を芽生えさせてくれると言われています。その読み聞かせを父親に身近に感じてもらい、日々の実践はもとより、終了後も「パパ友」として、育児の話ができるような仲間づくりのきっかけにしてもらえばという期待を込め企画しました。講座は2回1講座とし、3カ所で行いました。

【第1弾】「育メン読み聞かせ講座in明野」会場：大分市明治明野公民館19時～

参加者：大人15名 子ども2名

10月 2日（火） ○講演「読み聞かせで楽しい子育てを！」  
○読み聞かせ実演

10月16日（火） ○交流会講演に対する質問・体験報告等

【第2弾】「育メン読み聞かせ講座&家族で読み聞かせを楽しもう！」

会 場：大分市社会福祉センター 10時30分～

参加者：大人15名 子ども7名

11月18日（日） ○講演「子育て‘本とも’の時間」  
○読み聞かせの実演

12月 2日（日） ○交流会講演に対する質問・体験報告等

【第3弾】「育メン読み聞かせ講座」～育ジイ（先輩育メン大歓迎）～

会 場：大分市コンパルホール18時30分～

参加者：大人20名子ども3名

12月26日（水） ○講演「子育て‘本とも’の時間」  
○読み聞かせの実演（男性の声で）

1月16日（水） ○ミニ講演「本との橋わたし私たち大人ができること」  
○読み聞かせの実演（男性の声で）・交流会フリートーク

対象を、第1弾目は企業、第2弾目は商業関係、第3弾目は行政に勤務するパパを中心になりましたが、それに限らず幅広く募集しました。勤務の都合で1回だけ参加の方も、書面にて体験記や感想などを届けてくれました。交流会では、講演を聞いた後に子どもさんに読んだ絵本、その時のお子さんの様子、ご自分の感想等を発表してもらいました。

「『これ読んで』と本を持ってきてくれるようになって嬉しい」や「読み聞かせデビューは、ひらがなどの格闘でした」など微笑ましい感想もありました。しかし、講座に参加するということ自体、パパたちにとってはハードルが高かったようで、人集めに苦労しました。奥さんから勝手に申し込まれたというパパもいました。家庭での読み聞かせで、絵本や児童書に慣れ親しんだ子どもたちは、幼稚園や小学校での集団の読み聞かせよりも一層楽しめるだろうことを期待します。



## 2. 「赤ちゃんと絵本との出会い」～親の心を我が子へ贈る小さな試み～

＜大分市堀永産婦人科医院＞

読み聞かせに関心を持っていた医院と「読み聞かせの魅力や素晴らしさを伝えたい」と思っていた我々が同じ思いで始めた事業です。毎月1回、産後1ヶ月のお母さんたち、30人前後に絵本の読み聞かせの実演と講話をを行っています。  
—昨年からの引き続の事業—

## 3. ブックトーク～読書の楽しさと幅広い書物の魅力を伝える推進活動～ <大分市立明野北小学校>

「自らページをめくり本を読む」という読書の楽しみを子どもたちに伝え、幅広い内容の書物に興味を持たせ、読書意欲を引き出すとされる「ブックトーク」の普及拡大のための事業です。今年度は、2月28日に大分市立明野北小学校において、3時間目に3年生（3クラス）、4時間目に4年生（3クラス）で「大分ブックトーク研究会」によるブックトークを実施しました。

—昨年度からの引き続の事業—

## 4. 「朝日村フェスタ2012」別府市立朝日中学校

9月16日、朝日中学校PTA主催による「朝日村フェスタ2012」において「紙芝居文化の会大分支部」のメンバーを中心に、大学生、高校生による紙芝居や絵本の読み聞かせをしました。

—昨年度からの引き続の事業—

## 5. 「大分大学開放イベント2012」

NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの活動のひとつである人材育成事業から結成された「大学生による読み聞かせボランティア「ゆい（結い）」」が、11月4日大分大学開放イベントに参加しました。開館したばかりの大分大学の図書館で、模擬勉強会（11時～12時）や紙芝居や絵本の読み聞かせリレー（12時15分～14時）を行いました。読み聞かせボランティアグループ「ゆい（結い）」は、2012年5月に結成し、毎月1回、読み聞かせの仕方や絵本についての勉強会をしながら、子どもルームや小学校でのボランティアをしています。



## 実践4 高校生の自立支援プログラム実践事業

【報告】1期生 加藤 俊一

「青少年の最終期」にあたる高校生の自立とは、社会に出るための準備であると考えます。人とのコミュニケーションがとれる人間づくりが高校生段階においても大きな課題です。この事業は「高校生が自立のためにどんな学びをするか。」という課題に、大分県国東高校JRCがモデル的に取り組むもので、その支援を、大分県の委託事業として実施したものです。

大分県国東高校JRC (Junior Red Cross : 青少年赤十字・生徒49名) は、2007年の設立以降、2010.10 「食の甲子園 in やまがた全国大会」最優秀賞受賞、2011.6 「食育ボランティア表彰」内閣府特命担当大臣表彰等を経て「食の研究」「食を通しての交流エクササイズ」を培ってきました。本事業は、これまでの蓄積をもとに、「食を通した子ども・高齢者などの異世代交流そして子ども支援」を主要な取り組みテーマとし、地域と密着した地域貢献をとおして、高校生の人間性、社会性の自立への成長を育むものです。また、多様な人が関わり、知徳体に調和のとれた子どもを育てる「協育」も視点に事業を展開しました。なお、国東高校JRCの活動は、全国的にも数少ない極めて特徴的な取り組みでもあります。

### 1. 事業の概要

- (1) 期間平成24年10月～平成25年2月
- (2) 場所県立国東高校および国東市内施設
- (3) 主催：NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット

連携：国東高校、国東市ボランティア協議会、社会福祉協議会、国東保健部、国東市保健センター、東部振興局、食生活改善推進協議会、東国東デザイン会議、武蔵漁協、日本3B体操協会、「いちご会」、障害者支援センタータイレシ、等  
多くのネットワークが高校生を「協育」支援しました。

受益的対象：国東高校JRC生徒49名、子どもたち25名・保護者20名、支援学校生徒10名、  
高齢者120名以上延べ500名

- (4) 事業/プログラム

#### ①狙い

1つは、「国東高校生の「自立・自己実現」支援モデルプログラム化への支援」です。

2つ目は、「国東市の「協育」ネットワークづくりの取り組み」です。  
→そして「仏の里くにさき」+「教育の里くにさき」を目指す

#### ②高校生の自立支援を促す本事業の4つの要件とは

- ◆自尊感情（他者への思いやり、感謝の心、人権等）
- ◆規範意識（自己抑制力等）
- ◆社会的対応力（常識、協調性等）
- ◆勤労観・職業観（労働の魅力、価値等）

#### ③プログラム

「食を通した異世代交流」をコンセプトとし、6つにグループ化した国東高校JRC顧問（指導者）が作成した5種類のプログラムを計10回実施しました。

プログラム1：地域の子どもとの交流3回

　　地域の子どもたち対象2回

　　障がいのある子どもたち対象1回

プログラム2：卒業生OBとの交流1回



プログラム3：企業人から学ぶ1回

プログラム4：地域づくりの活動から学ぶ1回

プログラム5：高齢者との交流から学ぶ4回

## 2. プログラムの実践を通して

### (1) 高校生の様子の観察と自立支援の成果評価

JRC顧問がプログラミングした異世代交流プログラムは、それぞれが高校生の4つの自立支援要件を要素で備えていて、極めて体系的な総合プログラムだと思います。各プログラム毎に4自立支援要件からの成果を見ることとします。

①JRC生徒の挨拶等の社会習慣性は、既に自立の域に到達していると考えます。

・笑顔で礼儀正しいあいさつ、きびきびした適切な行動、積極的な質問・意見

②異世代交流の様子は、常に「真剣、規律、笑顔、おもいやり」に満ち満ちていました。

③活動ツール源である「食」の対応は、調理、包丁の扱い方等、レベルの高さを感じ、料理を通じた大きな交流成果も確認しました。

④JRC生徒は、信じられないほど純粋であり、既に多くの要素で人間性を醸成していて、本事業は「より素晴らしい人材育成」の一助にすぎなかつたかもといいます。

### (2) 高校生の声（一部）

- ・ありがとうと笑顔で言ってくれて、本当にうれしかった。
- ・今まで以上に福祉の仕事の興味を持った。やりがいを感じた。
- ・広場での最後の歌は、みんなでひとつになれたと感じた。
- ・会話が成立せず、戸惑いました。自分が何をすべきかわかつても行動に移せませんでした。でもこれまでに無い体験が出来て良かったです。
- ・人見知りが激しかったけど、段々変ってきている。



### (3) 「協育」の肯定的な捉えと「協育」の蓋然的な捉え

①交流者同士が双方向の「協育」活動であり、そこから「共育」が始まると考えられます。

②活動にかかるヒト全てが「協育」、「支援の協働」をしている事が求められます。よって、前述の連携者がそれぞれ果たした役割、そして私たち主催者が果たした役割を整理することが必要です。



③かかるモノ全ても同様です。

④かかるトキ（空間）も同様です。

本事業をとおして「協育」の有効性を感じました。さらに、「協育」についての必要性・可能性（蓋然性）を考える機会もありました。

## 3. おわりに

近い将来、高校生のキャリア教育が計画されています。キャリアとは、職業・勤労だけで無く、人間としての自分探しであり、キャリア形成です。国東高校JRCは、素晴らしい指導者のもと、その理想とした活動を実践しています。この活動が「教育の里くにさき」に繋がり、まちづくりに繋がり、県内に拡がることを願い、支援していきたいと考えています。担当として、大分市・国東市の往来はハードでしたが、都度さわやかさをくれた高校生に感謝し、彼らの未来にエールを送ります。



## 第3章 大分県における地域「協育」推進の取り組み

第3章では、第1節は大分県教育委員会が進める「協育」ネットワークの構築に関する、市町村事業や県事業の現状を報告するものです。さらに、第2節は大分大学高等教育開発センターが重点的に実施している取り組みを報告します。

### 第1節 大分県教育委員会が進める「協育」ネットワークの取り組み

#### 1. 大分県内の「協育」ネットワークの状況等について

大分県教育委員会では、子どもを取り巻く様々な問題が指摘される中、教育の担い手である学校、家庭、地域社会がそれぞれの役割を果たすとともに、三者が連携・協働して子どもの育成に取り組む「協育」ネットワークの構築に、市町村教育委員会と連携して取り組んでいます。

##### (1) 「協育」ネットワークの構築状況

	23年度	24年度
「協育」ネットワーク数	115	118
「協育」ネットワークの小学校カバー率	83% (250/301校)	87% (251/288校)

<「協育」ネットワークの基本的な枠組>

- ①公民館等を中心に学校、家庭、地域の教育の協働に係る関係者による会議等を組織していること。
- ②学校、家庭、地域の教育の協働をコーディネートする人材が配置されていること。
- ③中学校区程度の一定地域を範囲としているネットワークであること。
- ④学校支援活動、体験活動の機会提供、安全・安心な地域づくり等の具体的な教育の協働による活動を継続的に行っていること。

##### (2) 「協育」ネットワークの設置場所

24年度 設置場所 (計)	内 訳				
	公民館	教育委員会	自治会館	小学校	中学校
118	81	4	4	25	4

##### (3) 「協育」ネットワークの中核となるコーディネーター等の状況

24年度 コーディネート する人材 (計)	内 訳				
	コーディネーター	公民館長又は 主事	社教主事又は 指導主事	その他 教育委員会職員	学校の 教頭又は教諭
149名	81名	29名	13名	5名	21名

(4) 「協育」ネットワークを構築するための主な取組

取組	区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
学校支援 ○コーディネーターが学校の求めに応じて、学習支援や登下校時の見守り活動等に地域人材を派遣	本部数	55	56	56	57	59
	活動数	3,875	8,120	9,201	13,721	—
	支援者数(延)	28,782	60,136	61,266	68,703	—
放課後子ども教室 ○放課後等に小学校等を活用して、地域住民との交流やさまざまな体験活動等を実施	教室数	102	119	120	151	150
	参加児童等数	3,833	3,442	4,273	4,496	—
	支援者数	2,124	1,967	1,985	2,088	—
学びの教室 ○放課後等に小学校等を活用して、地域住民による国語、算数、英語等の学習支援を実施	教室数	—	22	59	71	74
	参加児童等数	—	631	1,590	1,990	—
	支援者数	—	66	342	540	—

※数値は、県補助事業実施分のみ掲載

(5) 地域との連携を推進する担当教職員の配置状況

	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
小学校に占める割合	38%	68%	87%	93%	95%	97%	99%
中学校に占める割合	36%	62%	87%	92%	94%	96%	98%

## 2. 大分県立社会教育総合センター研修事業

### 平成24年度地域教育力活用研修

(1) 趣旨 教職員を対象に、学校教育活動における家庭・地域との効果的な連携に関する研修をとおして、豊かな学校教育活動の推進を図る。

(2) 期日 平成24年6月28日（木）

(3) 対象 教職員（地域との連携を推進する担当教職員、テーマに関心のある教職員）

(4) 日程 13：30～13：40 開会主催者挨拶、諸連絡等

13：40～14：40 研修Ⅰ【基調提案】

①講 義 今、なぜ地域との連携、地域の教育を取り込んだ教育活動が求められるのか  
～国・県の動向等からその意義と必要性、そして私たちの役割を考える～

講 師 大分大学高等教育開発センター教授 中川 忠宣氏

②事例発表 「学校と地域の連携を支えるコーディネーターの取組

～成果と課題から見えてきたこと～

発表者 中津市山国中学校区「協育」コーディネーター 梶原 豊美氏

14：50～15：50 研修Ⅱ【事例研究】

「地域の教育力を活用した教育活動の成果と課題」

発表者 中津市立三郷小学校教諭 松田 昌夫氏

コーディネーター 大分大学高等教育開発センター教授 中川 忠宣氏

### 平成24年度市町村指導主事・社会教育主事等合同「協育」研修会

(1) 趣旨 子どもの「生きる力」を育む学校教育と社会教育の協働の在り方に関する研修を行い、各市町村教育委員会学校教育主管課及び社会教育主管課のより一層の連携を図りながら、次代を担う子どもの健全育成に資する。特に、今年度は、各市町村における「教育の協働」を推進するためのグランドデザイン作成の視点及び作成方法等について研修する。

(2) 期日 第1回平成24年7月6日（金）第2回平成24年9月28日（金）

(3) 対象 ○県及び各市町村指導主事及び社会教育主事等社会教育関係職員

(4) 講師 講師；大分大学高等教育開発センター教授中川忠宣氏

(5) 内容 テーマ：「教育の協働」を推進するためのグランドデザインの構築

時間	第1回	第2回
10:00	研修Ⅰ（講義） 「『教育の協働』を推進するためのグランドデザイン構築の意義」 *子どもの「生きる力」を育むための学校教育と社会教育の協働の視点と方策 *グランドデザイン作成の視点と方策	研修Ⅲ（グループ演習） 「『教育の協働』を推進するためのグランドデザインの作成②」 *「教育の協働」システムの構想づくり
13:00	研修Ⅱ（グループ演習） 「『教育の協働』を推進するためのグランドデザインの作成①」 *学校・家庭・地域の連携に関する現状診断と処方箋の整理 *グランドデザインの枠組づくり	研修IV（グループ演習・発表） 「『教育の協働』を推進するためのグランドデザインの作成③」 *市町村ごとのグランドデザインの作成
16:00		

### 3. 大分県立社会教育総合センター九重青少年の家事業

#### このえチャレンジスクール「由布市庄内町6小学校宿泊合宿」

##### (1) 目的

現在、児童生徒の規範意識や協調性の低下、青少年の自立意識の希薄化等が大きな問題とされ、原因として生活習慣の乱れ、希薄な対人関係、直接体験の不足など学校、家庭、地域の教育力の低下が指摘されています。このような中、平成20年に出された「小学校学習指導要領解説特別活動編」では『集団宿泊活動』について、「望ましい人間関係を築く態度の形成などの教育的な意義が一層深まるとともに、高い教育効果が期待されることなどから、学校の実態や児童の発達段階を考慮しつつ、一定期間にわたって行うことが望まれる」とされています。

本事業は、これまで、平成21年度九重町立飯田小学校、平成22年度宇佐市立佐田小学校、平成23年度佐伯市立上野小学校の小学校5年生を対象として、4泊5日の宿泊体験プログラムを、地域の人材等を活用しながら、5日間の体験活動についての「壁新聞づくり」をプログラムの柱として実施してきました。

3年間にわたる事業を検証したIKR調査の事業実施事前から事後では、思いやり、明朗性、交友・協調、積極性にプラスの変化が見られました。教職員へのアンケートからも、長期宿泊体験による児童のプラスの変化を教員も感じることができたようである。また環境学習についても、「地熱発電、温泉熱を利用したバラ栽培、観光」等、地域の特徴を活かした活動を実施できました。

本年度の本事業では、これまでの実績を基に、学校がかかえる今日的課題である、基本的生活習慣や規範意識、協調性等を育成することに加え、中1ギャップを軽減する人間関係の構築を目的としました。本事例集はプログラム内容を中心とした事業の概要ですので、詳細は、九重青少年の家へ直接お問い合わせください。

##### (2) 実施日

平成24年10月22日（月）～10月25日（木）3泊4日

##### (3) 実施団体

由布市立阿南小学校6年生・由布市立大津留小学校6年生・由布市立東庄内小学校6年生

由布市立西庄内小学校6年生・由布市立南庄内小学校6年生・由布市立阿蘇野小学校6年生

##### (4) 実施したプログラムと時間数

番号	活動名	内容等	教科（時数）
活動 1	仲間づくりプログラムⅠ	アイスブレーキング	体育又は総合（1）
活動 2	話し合い活動①	班活動（顔合わせ等）	特活（1）
活動 3	授業（算数）	3つの値段は？	算数（1）
活動 4	授業（社会）	日本国憲法	社会（1）
活動 5	話し合い活動②	ビーグル、係決め、登山準備	特活（1）・道徳（1）
活動 6	話し合い活動③	ビーグル（ふりかえり）	特活又は道徳（1）
活動 7	星生山登山	扇ヶ鼻登山 *土地のつくり観察 *高山植物等観察	体育（2） 理科（1）
活動 8	仲間づくりプログラムⅡ	問題解決アクティビティ	体育又は総合（1）
活動 9	大学生との交流	ドッヂボール	特活又は総合（1）
活動10	話し合い活動④	ビーグル（ふりかえり）	特活又は道徳（1）
活動11	飯田高原探索	長者原ビジターセンター・大吊橋	社会又は総合（3）

活動12	自然観察	昆虫採集・ネズミの観察	理科（2）
活動13	授業（国語）	短歌をつくろう	国語（1）
活動14	授業（図工）	ネイチャークラフト	図工（1）
活動15	仲間づくりプログラムIII	問題解決アクティビティ	体育又は総合（1）
活動16	プラネタリウム	秋の星空、月	理科（1）
活動17	話し合い活動⑤	ビーイング（ふりかえり）	特活又は道徳（1）
活動18	野外炊飯	カレー作り	家庭科（4）
活動19	仲間づくりプログラムIV	アスレチック	体育又は総合（1）
活動20	話し合い活動⑥	ビーイング（ふりかえり）	特活又は道徳（1）
活動21	飯田高原探索（登山中止時）	泉水ローズガーデン・地熱発電	社会又は総合（3）

## （5）日程及び概要（実施状況）

以下に、活動1～活動21のプログラムを紹介します。

【1日目】10月22日（月）

### 活動1 仲間づくりプログラム

- ・フルバリューコントラクト、チャレンジバイチョイスの約束事を確認した後にアイスブレーキングを実施。  
 ①お願いゲーム②後出しジャンケン③ジャンケンチャンピオン④せーの！⑤キャッチ⑥パントンパンパントントン⑦ビート1～5⑧仲間集めゲーム（血液型・好きな動物等）⑨ネームチェーン⑩バースデーチェーンなどのアクティビティ。



### 活動2 班活動（顔合わせ）

- ・初めての班活動では、自己紹介をした後に、フープリレー やUFO着陸などのイニシアティブゲームをしました。

### 活動3 授業（算数）・活動4 授業（社会）

- ・4班合同のクラス毎（2クラス）に分かれての授業（算数の授業と社会科の授業）



### 活動5 話し合い活動（ビーイング、係決め、登山事前学習・準備）

- ・ビーイングでは、2班合同のチーム毎に分かれ、仲間づくりをしていく中での「自分の目標」「チームのためにしていきたいこと、できること」「こんなことをされると嫌だな」ということを、手形をつなげた象徴に書き込み発表。その後、班の目標を決定。
- ・係決めでは、ビーイングの話し合いをうけて、係分担を決定。
- ・登山の事前学習・準備では、久住山についての説明、登山中の注意事項説明、目標設定。



### 活動6 話し合い活動（ビーイング、ふりかえり）

- ・①人間知恵の輪のイニシアティブゲームをした後、2班合

同のチーム毎に分かれ、活動5で話し合った内容をもとに、1日目のふりかえり。

### 【2日目】10月23日(火)

#### 活動21 飯田高原探索（雨天時プログラム）

- ・泉州ローズガーデンでは、温泉熱を利用したバラ栽培、八丁原地熱発電所では、地下から取り出した蒸気を利用するクリーンな発電を見学。



#### 活動7 扇ヶ鼻登山

- 牧ノ戸峠→沓掛山→扇ヶ鼻分岐→扇ヶ鼻山頂→扇ヶ鼻分岐  
→沓掛山→牧ノ戸峠
- ・午前中を雨天プログラムとしたので、急遽午後からの活動を扇ヶ鼻登山に変更。天候の急変により、非常に寒く（牧ノ戸峠5°C）、4名の断念者を出したものの、残りの児童は無事扇ヶ鼻の登頂に成功。



#### 活動8 仲間づくりプログラムⅡ

- ・①魔法の鏡、②フープリレー、③いっせーの！等のイニシアティブゲームを班やチームで実施。

#### 活動10 話し合い活動（ビーイング、ふりかえり）

- ・2班合同のチーム毎、活動5で話し合った内容をもとに、2日目のふりかえり。

### 【3日目】10月24日(水)

#### 活動11 飯田高原探索活動12自然観察「飯田高原の自然と生きものたち」

- ・長者原ビジャーセンター、タデ原湿原では、飯田高原の自然やその保全についての学習。
- ・九重“夢”大吊り橋では、日本一の高さと長さを体感し、そこから眺める雄大な自然、日本の滝百選「震動の滝」雄滝や美しい紅葉を目の当たりにした。
- ・セブンイレブン九重自然学校の川野さんによる「ネズミの観察」と朝倉さんによる「昆虫採集」で、飯田高原の自然環境と動物の関係についての学習。



#### 活動13 授業（国語）活動14授業（図工）

- ・4班合同のクラス毎（2クラス）に分かれての授業。

#### 活動16 プラネタリウム

- ・星空や宇宙についての番組視聴

#### 活動15 仲間づくりプログラムⅢ

- ・①あやとり、②人間知恵の輪、③みんなでジャグラー等のイニシアティブゲームを班単位で実施。

#### 活動17 話し合い活動（ビーイング、ふりかえり）

- ・班毎に分かれ、活動5で話し合った内容をもとに、3日目のふりかえり。

【4日目】10月25日(木)

### 活動18 野外炊飯

- お互いのことをよく考えながら、役割分担をして、班毎にカレー作りに挑戦。すべての班が、失敗せずに、おいしいご飯とカレーを作り上げることができた。

### 活動19 仲間づくりプログラムIV

- 学校側の要請により、アスレチックでの班を単位として活動に変更。

### 活動20 話し合い活動（ビーイング、ふりかえり）

- 班毎に分かれ、活動5で話し合った内容をもとに、4日目及び4日間のふりかえり。

#### (6) 事業評価

以下の方法で事業評価をしましたが、紙面の関係上データーを省略します。

##### ① 「IKR〔生きる力〕評定用紙（簡易版）」による測定

本事業の参加者に対して、オリンピックセンターが進めている「事業プログラムの効果測定方法の開発研究」で作成された「IKR評定用紙（簡易版）」を実施しました。分析方法は、オリンピックセンターが行った分析方法にならい、3つの上位指標と下位指標及び全体について、得点の平均を比較しました。

##### ② 「事後アンケート調査」の結果

本事業の参加者（児童・教職員・地教委）及び保護者に対して、本所が作成した「事後アンケート」を実施しました。実施方法は、事業実施2週間後の11月8日（木）に各学校及び由布市教育委員会に赴き配布し、11月20日（火）に回収しました。

#### (7) 成果と課題

##### ① 成果

測定結果や考察から「生きる力」が事業を通して身についたといえると評価しています。つまり、開発したプログラムや指導方法が、子どもたちの「生きる力」を育む上で効果的であり、それを示すことが事業の主旨であるモデルプログラムの開発に応えるものと考えます。毎日の最後に行う「ビーイング（ふりかえり）」では、活動プログラムのふりかえりを中心に、生活上の問題についても話し合いを行いました。このプロセスも「グループの力の向上や仲間づくり」には有効であったと考えます。今回の事業では「こここのえ体験教育プログラム」を取り入れることによって成果を得ることができました。つまり「こここのえ体験教育プログラム」は「グループの力の向上や仲間づくり」を育む上で効果的な指導法であることが実証されたといえます。

##### ② 課題

「IKR評定用紙（簡易版）」の結果からは、「生きる力」が身についたことがみてとれます。しかしながら、これは事業参加者全体の平均得点の比較の結果であり、この結果を学校や班毎個人毎に見ると当然のことながら差があります。

事業の主目的は、「グループの力の向上や仲間づくり」であるが、究極的目的は、個人の力を高めることでもあります。個人の高まりの結果がグループの高まりであり、個人の力を高めるためにグループの力を高めるのです。つまり、全体の結果も事業効果を示しているに違いないが、学校や班、個人にも目を向ける必要があります。学校や班によっては、得点自体が低かったり、得点の伸びが小さかったり、各項目や下位能力の事後が事前に比べマイナスとなり、後退したりしている指標もあります。しかし、問題は得点が低いこと等ではなく、「なぜ得点が低いのか」、「なぜ後退しているのか」等、その原因を探ることが重要です。また、事業中、得点の低い班や後退している場面に適切な介入ができなかつたことが課題です。その他、多くの課題も見えてきました。

学社連携体験活動プログラム開発プロジェクトは、本年度で終了ですが、これまで開発した体験活動プログラムや成果を県内の各小学校に周知し、本所入所時の活動プログラムの参考にしていただけるよう努力したいと考えています。

## 第2節 大分大学高等教育開発センター関係の取り組み

### 実践1：主催事業＊平成24年度「『協育』アドバイザー養成講座」の実施

#### はじめに

改正教育基本法や教育振興基本計画をふまえ家庭・学校・地域社会が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的として「学校支援地域本部事業」が始まりました。これまでには、家庭、学校、地域社会がそれぞれの取り組みとして行うことにしており、もはや単独での取り組みは限界にきていると言わざるをえない状況です。このことから、家庭、学校、地域社会の相互の連携協力を促し、それぞれの教育力を向上させるとともに、教育を協働して行う必要性が明確になったと言えます。これからの教育が、「青少年を育成する学校教育、社会教育、家庭教育の連携」、「家庭教育を支援するための福祉活動との連携」、「高齢者の生きがいを創出するための福祉活動の連携」等々、地域全体が連携協力して、縦割りの取り組みから、「横の接続」を促進する取り組みの重要性が認識されてきたと言えます。

そこで、こうした取り組みに対して民間の教育力を發揮し、「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進するために、地域ぐるみでの学校や地域での子どもの健全育成や家庭教育への積極的な支援、福祉と教育の融合、及び大人社会の再構築を推進する中核的な人材の養成を行うことを目的として開講しています。

さらに、受講修了者のネットワークを組織化し、受講生の職場や地域での日常的な活動を支援するとともに、受講生の活動情報を収集・分析し、「協育」コーディネーター育成プログラムの開発や提供をすることによって、本県における「家庭、学校、地域社会の教育の協働」システムの構築に寄与するものです。

### 平成24年度第四期生「『協育』アドバイザー養成講座」【基礎編】

#### 1. 趣旨

子どもは人間社会（地域社会）で教育され、「子ども自身が生き方を学ぶ」ための様々な教育活動や生きた体験が求められている。そのために家庭・学校・地域社会が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進し、学校や地域における子どもの生きた教育活動支援が重要な要素となっている。

よって、「『協育』アドバイザー養成講座の実施について」により、教育の協働を推進する中核的な人材を養成するための基礎的な研修を実施する。

2. 日時 平成24年11月23日（金）9：00開講～16：30閉講

3. 会場 大分県立社会教育総合センター

〒874-0903 別府市野口原3030-1（大分県ニューライフプラザ内）

4. 対象者 学校支援や地域活動支援、家庭教育支援等に関わるコーディネーター

各種団体・グループ、N P O等の活動者、社会教育関係、学校教育関係者

その他、趣旨に賛同し、職場及び地域等において受講したことを活用できる者等

※推薦者が必要ですので了解願います。

5. 申し込み（問合せ）方法

①受付：平成24年9月3日（月）～10月31日※郵送・ファックス・メール可

②申し込み先：大分市旦野原700番地 大分大学教育支援課（公開講座担当）

③電 話：097-554-7641／8522 FAX：097-554-7445  
④Eメール：kyokikss@oita-u.ac.jp

6. 修了証 講座の全日程を受講したものには大分大学学長の修了証を授与する。

## 7. 修了者のネットワーク化

修了者が、それぞれの職場や地域での日常的な活動を充実するための活動情報の収集・提供、それぞれの活動の情報交換、及び各種研修、モデル事業の実施、県内活動組織のネットワークの促進等を行うNPO法人「大分『協育』アドバイザーネット」を支援します。

## 8. 講座の内容

研修1：9：00～9：40 「『協育』アドバイザーネット講座」について

大分大学高等教育開発センター 教授 中川忠宣

### 【講義の内容】

社会は常に変動している。その短期、長期の社会構造なり秩序の変化には流行がある。流行とは、特定の社会や集団において一時的に許容されるものである。そこで必要なのは流行を見る視点だ。なぜその流行が必要なのか、事実と流行を繋いで流行を見つけたり意味・価値を見いだすことが求められる。それを地域社会が学校の外から提案する、つまり地域社会から「教育の協働」を見る。学校教育のすき間支援として地域社会が対処療法を行い、さらに原因療法まで行う。そのことが、地域の大自身の生きがいや地域の再構築、次世代を担う子供の育成に繋がる。すなわち結果的に双方にプラスになるのである。



「滋賀県大津市の中学生の自殺事件」の構造を見てみる。その地域での学校を取り巻く人的環境は、そのいじめという事実について本当に認知していなかったのか、知っていても口にできなかつたのかという疑問が出てくる。そこで理想とされるのが親・地域住民が学校のすき間から支援をするという体制だ。教員一人が教室の生徒40人全てを把握するのは無理がある。だからその負担を軽減するというよりは、分かち合う、助け合うといった意味で親・地域住民が教育に関わり、子どもたちの姿を見ることが大切だ。そして、その仲介役を務めるのがコーディネーターである。

教育の協働の背景に、今の子ども達の道徳心や公共心が薄れている、学習意欲が低下している、家庭の教育力が低下していると思っている人が増加していることが上げられる。そのために必要なことは保護者・教職員の教育力を上げること以上に、家庭・学校・地域が協力することと考える人が多い。こうしたことへの対応として、私たちが住む大分県で行われている取り組みにはどのようなものがあるのだろうか。大分県には19年度から27年度にかけて「地域教育復興プラン」を作っている。具体的には学校の授業・図書館運営等に大人が参加したり、幼稚園・老人ホームに中・高・大学生が参加する取り組みがある。地域の資源（人）をいかに活用するかが大切である。しかし、実際は子どものためにボランティアをしたいと思っている人は多くても、現実は5%程度しかいない。学校と地域の住民、専門家・企業を繋ぐコーディネーターの働きが大いに期待される。

研修2：9：45～11：05

講義①東京都杉並区立杉並第一小学校学校支援本部の取り組み

～学校支援地域本部の取り組みと、学校運営協議会・PTA・放課後子ども教室との連携～

講師：杉並区立杉並第一小学校学校支援本部長 伴野 博美氏

平成14年から杉並区学校教育コーディネーターとして活動をはじめ、東京都杉並区で最初の地域子ども教室「すぎっ子クラブ」を立ち上げ、平成16年から拠点リーダーとして子どもの居場所づくりに関わってきました。平成19年度からは杉並第一小学校の学校支援地域本部長として学校と地域の連携・協働活動のプログラムを展開しています。最近では「学校のすき間支援」として地域の方の参画による「朝先生プログラム」は多方面からの高い関心と評価を受けています。

役職 文部科学省 社会教育アドバイザー

杉並区立杉並第一小学校学校支援本部長

杉並区立杉並第一小学校学校運営協議会委員

その他、東京都の学校支援コーディネーター企画委員等、実践的な活動を推進中

～学校支援地域本部の取り組みと、学校運営協議会・PTA・放課後子ども教室との関係～



【講義の内容】

伴野さんは息子さんの出身校である杉並第一小学校で杉並区で最初の地域子ども教室「すぎっ子クラブ」を立ち上げ、平成16年から拠点リーダーとして子どもの居場所づくりに関わっている。さらに平成19年からは学校支援地域本部長として、地域と学校教育との連携・協働活動を展開している。杉並区は、近隣の5校から学校を選ぶことができる。そのため人気がない学校は児童数が少くなり、結果的に母校が廃校になる可能性もある。地域の拠点である学

校を守るために、地域が当事者意識を持って学校づくりを行わなければならない。

学校支援本部が展開する「杉一プラン」なるものがある。その活動として多方面から高い関心と評価をうけて実施されているのが「朝先生プログラム」だ。朝8時15分から一時間目の授業開始まで、クラスで国語・算数の総合的学習や百人一首の勉強、読書などをする。このとき先生となるのが杉並区の住民で、彼らは「朝先生」と呼ばれる。この成果として、先生方が朝の大事な打ち合わせに集中できる、一時間目の授業が落ち着いた雰囲気のまま始められるといったプラスの面が多く生まれた。さらに朝先生が子どもたちを「杉並区のある子ども」ではなく、自分のクラスの子として名前を知ったうえで見るので、地域内でも朝先生と児童の会話が増え、地域の活性化につながっているという。学校の先生が気づくことのできない登下校中も地域住民は目を配ることができるために、いじめの対処を原因から行うこともできる。親が忙しくてなかなか思うように子どもの世話ができなくても地域と一緒に子育てを行うことで、親の負担も減り、地域の中にいる方の才能を生かす場ができる。

伴野さんが創設した「すぎっ子クラブ」で働くスタッフも、もちろん地域の住民の方々である。子どもたちが放課後「ただいま！」とやってきて一緒に遊んだり、宿題をする。加えて、連絡帳のやり取り

を毎日スタッフが行うことで若いお母さんともつながっている。お母さんたちは子育ての先輩でもあるスタッフに子育てに関する相談にのってもらうことができる。伴野さんは、子どもたちだけでなく、若いお母さんも地域で育成しようとしている。さらに、先生から親には言い出しにくいようなことや、逆に親から先生に言い出しにくいようなことの間に立って伴野さんが伝達することもあり、子どもも親も先生も居心地のいい環境を作りパイプ役となっている。「教育」は「共育」である。保護者—先生—地域の協力体制をとり、共に地域の子どもたちを育てることである。

研修3：11：15～12：30

### 講義②子どもの「生き方」の学びを支える地域の教育資源と大人の役割

講師：特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長 生重 幸恵氏

PTA会長時代から学校を支援する活動を積極的に行ない、区内の他校PTA会長経験者と共に平成14年7月にスクール・アドバイス・ネットワークを設立し、杉並区教育委員会との協働や東京都内各区の教育委員会とも連携したり、さらには全国各地での学校支援や地域活性化のプロジェクトに参画したりして、活動の範囲を広げています。一方、企業の地域教育貢献の必要性とその方法などについてアドバイスし、企業の持っているノウハウを学校授業に繋げるためのプログラム作成なども手がけています。平成22年2月から文部科学省第6期中央教育審議会中央委員として活躍しています。

「子ども達の成長に町ぐるみで関わることで、大人もパワーをもらいましょう。大人も子どもも、自分達の住む町に愛着が持てる・誇りが持てる学校教育支援活動で異世代の交流・自慢の町おこしが生まれます。」と、熱く語ってくれます。

役職 文部科学省 中央教育審議会 中央委員

特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク統括マネージャー

社団法人キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会理事長

その他の各種役職を担うと共に、全国各地の講演会や研修で活躍中



#### 【講義の内容】

現代の子どもたちが抱えている課題は、学びに対する興味・関心の薄さ、体験や経験の少なさ、将来との関係性が見えない今までの学び、受験勉強偏重型が起こす受験終了後の学びへの意欲の低下がある。「なぜ勉強しなければならないのか?」「今の学習が将来どんなことに役立つか」などについての発見、心搖さぶられ、納得できたと思える具体的な体験・経験が学習意欲につながる。見る・聞く→知っている、となるということは、結局体験が一番重要なのである。

その体験を取り入れた教育から、子どもの言葉の表現が生まれる。その言葉というのは、なにかを経験した本物の言葉である。お互いに言葉の表現をとおして感動を共有することが子どもにとって必要なのである。

さて、その経験・体験を学校でするとしよう。決められた時間数・授業時間、かつ教室の中で教師が子どもたちにさせてあげられる経験はどのくらいあるのだろうか。残念ながら学校でその時間を十分にとることは不可能である。そのような時にどうするのか。「地域」である。地域には経験・体験をする

ための資源、時間が多くある。その資源を生かすことで子どもの普段の教室が「リアルな世の中」と直結する。その資源というのは、外部の人材(地域で働く職人など)のことで、彼らが持っている使命感や誇りという「本物の姿」に接することが子どもたちにとって経験になる。その人たちが学校現場に入つて授業をすることは社会総参加での教育と言える。

学校教育で社会の変化に順応した教育を行うためには、学校教育と軌道を一つにした社会教育を推進していく必要がある。学校教育支援—家庭教育—学校外教育支援の、この三つが互いに連携をとらなければならない。そのネットワークをつなぐのが、地域コーディネーターである。地域コーディネーターとは、地域の中にある学校を支援しているさまざまな団体・機関と有機的につなぐためにボランティアベースで活動をする人のことである。基本的な考え方は「他人の子は知らないではなく、一緒に育てよう。」である。

教員は平均11時間以上働き、家でも1時間以上の仕事をしており大変多忙である。キャリア教育全てを教師がしようとすると、多岐にわたるさまざまな調整事項があり、通常の教科以上に手間がかかる。そのために、その役割を地域コーディネーターが行っている。その使命として、社会に出て行くまでに、社会で使える能力を身につけさせるシステムが重要である。

研修4：13：30～16：30【詳細な内容は、第2回「協育」見本市の開催に記載しています】

#### 「ワールドカフェ」の集い～「協育」見本市～

趣旨：子どもの様々な体験、文化の伝承、生きたキャリア教育、多くの人の交流等は単独機関・団体だけでは担いきれません。ましてや、地域にはどんな教育資源があり、教育現場が何を求めているのかなど、基本的な事項の共通認識が無ければ一步前へ進めません。そこで、供給する教育資源が需要者に対して自らの活動を提示して、提供内容やサービスなどをパンフや実物で紹介、あるいはデモンストレーションをして、子どもを育てるプログラムを広げる機会を体験します。

方法：ワールドカフェでは、参加者（教員やN P O、地域指導者等）数名が同じテーブルについて、ニーズとシーズを語り合う中で様々なプログラムのイメージを広げていくもので、数クールする中でプログラムの広がりと、人のつながりの広がりを作っていきます。

#### 指導者

特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク（統括マネージャー）生重幸恵氏  
杉並区立杉並第一小学校学校支援本部長 伴野博美氏

協力：N P O法人大分県「協育」アドバイザーネット

大分県立社会教育総合センター

#### おわりに

今回の『協育』アドバイザー養成講座で学んだことなど、受講生の声の一部を紹介します。

- ・講座を受講して、コミュニケーションの大切さを再確認させられました。いろいろな得意分野を持ち寄り、ネットワークを形成すれば、1人では限界になる活動がネットワークで実現できるように思いました。
- ・「学校の教育目標に沿った活動、また、年齢、学年に合った内容の活動プログラムを作る」という話が、とても参考になりました。講師の先生方のお話は、聞いていてワクワクすると同時に、とても大切な（「協育」を進めていく上で）言葉がありました。その言葉を胸に刻んで活動をしていきたいです。
- ・今自治会の活動もしているので、それをうまく利用して学校と自治会、自治会と老人会、老人会と子

供会のように学校を中心とした輪、繋がりを拡大するパイプ役を出来ないかと思っていました。今回参加をしていろいろな会に参加する事により繋がる物もあり、老人会などは逆に待っている状態なのでもっと参加出来る学校作りも手伝っていきたい！

- ・私が小学生のころには地域住民との関わりはそんなに濃い方ではなかったと思います。でも通学路でいつも声をかけてくれたおばちゃんのことは名前は思い出せませんが、笑顔や、態度は今でも思い出せます。地域住民の子たちへのかかわりはとても大事なことなのだと、今回の講演でわかりました。
- ・貴重なお話を聞かせていただきました。家族・学校・地域社会、皆で子どもを育てるることの重要性と可能性を改めて感じました。また地域コーディネーターの役割と、活用の仕方について自分でもよく考えてみたいと思います。
- ・「協育」の意味を理解して、それをどういう方向で活動としてやっていくかを考えると難しいですが、養成講座での研修をさせていただくことで、より深く理解が出来、方向性を少し感じることが出来ました。ありがとうございました。来年は是非上級編に参加させて頂きます。宜しくお願ひいたします。
- ・講師の先生方の熱い想いが伝わる内容で「協育」の本質が理解できるものでした。「協育」の活動を受け入れている地域・学校にその主旨がどのくらい理解されているのかによって、かなりの温度差が生じていると思います。今後も実践活動の紹介をしていただきたいと思います。
- ・伴野さんと生重さんのお話は本当に心搖さぶられました。お二人のお人柄を見るにつけ、組織や体制を整えるという事と同時にコーディネーターの資質が重要である事を強く感じました。

## 実践2：共催事業＊第6回「地域発『活力・発展・安心デザイン』実践交流会」

近年、青少年を取り巻く様々な課題や団塊世代・高齢者の地域参加の促進等が指摘されているところであり、学校や家庭、地域における様々な取り組みの連携・協力の必要性が言われています。こうした現状の中、県内各地で各種団体等の独自の取り組み、地域が学校と連携した取り組みなどが行われています。

本交流会は、こうした県内各地の実践者が自主的に集い、実践事例を交流することによって大人自身の活動エネルギーを蓄えるために、大分県生涯教育学会や、福岡県を中心に活動する「NPO法人幼老共生まちづくり支援協会」などと共に、さらに、地元教育委員会・生涯学習団体等と協力して開催するものです

テーマ：「大いに語ろう～今、大人がする子ども育て、そして、子どもが活躍するまちづくり～」

主 管 地域発『活力・発展・安心デザイン』実践交流会運営委員会

主 催 東国東地域デザイン会議 大分大学高等教育開発センター

共 催 大分県生涯教育学会 NPO法人幼老共生まちづくり支援協会

NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット

協 力 大分県「協育」ネットワーク協議会

期 日 平成25年2月23日（土）～24日（日）

会 場 ☆梅が咲き誇る三浦梅園生誕の地～「梅園の里」～☆

参加費 500円（会場使用料・資料代等）※宿泊費等は別途必要です。

### 交流会1日目

10：50 基調報告「教育の協働とコーディネートシステム」に関する全国調査の報告

大分大学高等教育開発センター 中川 忠宣 教授

基調提案「くにさき教育の里づくり」～国東『協育』ネットワークから

国東市教育委員会学校教育課 岩光 一郎 課長

### 12：50～実践事例発表

○第1分科会：子ども育ての秘訣を考える地域活動の事例

事例発表① 12：50～13：25

テーマ 「大学生による読み聞かせボランティアの実践」

発表者：大分大学教育福祉科学部3年松尾美幸

実演：大分大学経済学部1年外池夏子

梅の花が咲き誇る梅園の里！



事例発表② 13：30～14：05

テーマ 人と繋がる地域交流活動

…社会に飛び立つ前の高校生としての  
自立…

発表者：大分県立国東高等学校JRC代表4名

宮崎佳菜（2年）清原明里（3年）古河美由紀（3年）神崎穂正（3年）

事例発表③ 14：10～14：45

テーマ 「子どもの読書推進について」

発表者：読み聞かせ・学校図書館司書

安倍 元子

事例発表④ 15:00～15:35

テーマ 自然らしく生きられる社会を目指して

発表者：NPO法人 共に生きる江藤裕子

事例発表⑤ 15:40～16:15 【発表・質疑：35分】

テーマ 健やかな大田っ子を育むために

発表者：大田ふるさとづくり協議会副会長

野上美喜子

○第2分科会：学校園での活動や学校園と連携した活動の事例（5事例）

事例発表① 12:50～13:25 【発表・質疑：35分】

テーマ このえチャレンジスクール「由布市庄内町6小学校宿泊合宿」

発表者：大分県立社会教育総合センター九重青少年の家指導主事

山崎 充

事例発表② 13:30～14:05 【発表・質疑：35分】

テーマ 「鶴見防災キャンプ」

発表者：鶴見地域防災キャンプ実行委員

浜野 芳弘

事例発表③ 14:10～14:45 【発表・質疑：35分】

テーマ 子どもの教育環境づくり～「学びの教室」の取り組み～

発表者：「学びの教室 富来」学習アドバイザー

橋永久美子

事例発表④ 15:00～15:35 【発表・質疑：35分】

テーマ 「山国っ子は地域の宝 広がれ支援の輪」

発表者：山国中学校区協育コーディネーター

梶原 豊美

事例発表⑤ 15:40～16:15 【発表・質疑：35分】

テーマ 「地域とともにある学校づくり～玖珠中の提案」

発表者：玖珠町立玖珠中学校 校長

梶原 敏明

16:30～17:10 特別講演

講師 三浦清一郎 氏（生涯学習・社会システム研究者）

2020年の「高齢者爆発」に伴う社会的危機を回避できるか？

## 1 高齢者爆発

2020年は昭和20年生まれが75歳となり、以後、団塊の世代が続き、爆発的に「後期高齢者人口」が増大します。

## 2 絶望的な赤字サイクル

前期高齢者と後期高齢者の「医療費」・「介護費」の国家負担を想定すれば、現代の福祉システムは崩壊に瀕し、若い世代の老後を保証する国家財源は絶望的な赤字を積み増して行くことになります。

## 3 個人資産頼り

当然、政治は紙幣を増刷し、インフレ政策をとるので、個人の預貯金は一気に目減りすることになります。

## 4 企業頼み

定年が延長され、企業には65歳までの雇用義務が法的に課されました。高齢者の体力低下や労働リズムを考慮しない一律の定年延長政策は確実に企業効率を低下させることになるでしょう。企業は自衛のため、賃金水準を押し下げ、若者の就職はさらに難しくなり、社会不安も増大すると予想されます。

## 5 法も思想も「一律」発想

一方、高齢者が労働に従事し、所得を得れば、年金が減らされる仕組みが「生涯現役」の生き方を妨

害しています。「元気な高齢者」と「元気を失った高齢者」、「意欲のある高齢者」と「意欲を失った高齢者」、「社会に依存する高齢者」と「社会に貢献し続ける高齢者」を、すべて同列、一律に扱う日本社会の発想を変えない限り、生涯現役論は「絵空事」に終わります。

## 6 高齢者「保護」の偏見

高齢者は、教育においても、福祉においても、基本的に「保護」の対象としてしか認知されていません。「守られた生き物」は確実に弱体化します。高齢者の自立を促し、高齢者の社会貢献を顕彰し、高齢者の「生きる力」を鍛えるプログラムは皆無に等しいと思います。幼児化した介護現場の教育プログラムを選択制にするか、抜本的に見直すべきでしょう。

## 7 問題は無為と安逸

高齢社会では、高齢者の増加だけが問題ではありません。「何もしない高齢者」の増加こそが問題なのです。老衰とぼけは彼らの間で急速に進行します。「廃用症候群」も「オーバーローディング法」もいまだ国民の常識にはなっていません。

## 8 「死に方」を論議しなくていいか？

終末医療が膨大な国家支出の原因になっています。一日280億円という試算もあります。制度的に「安楽死」を認めるか、高齢者が「尊厳死宣言」を書くしか回避の方法はありません。

## 9 「望ましい高齢者」像の不在

日本社会は、様々に青少年を顕彰するシステムや「望ましい青少年」像を工夫してきましたが、「望ましい高齢者」像については考えたこともありません。高齢者の社会貢献を顕彰する仕組みも発想も貧しい限りです。安逸をむさぼり、無為に暮らしている高齢者も、老いてなお税金を払い、社会貢献をして暮らしている高齢者も政治や世間の待遇は同じです。政治は、せめて現行の「ボランティアただ論」を改めて、急ぎ「高齢者社会参加基金（ボランティア基金）」や「高齢者社会貢献顕彰制度」を制度化すべきです。

## 交流会2日目

### 9：30 テーマを語ろう！全体討論会

1部：シンポジウム「学校支援をとおしての子ども育て、大人の繋がりづくりを考える」

登壇者：

森本精造氏（NPO法人幼老共生まちづくり支援協会理事長・元福岡県飯塚市教育長）

生重幸恵氏（NPO法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長・東京都）

梶原敏明氏（玖珠町立玖珠中学校長・大分県）

2部：リレートーク（参加者がシンポジウムテーマに関する意見を自由に交換します）

議論の中から見出されたキーワードは、以下のようにとても幅広いものでした。この、このキーワードのいくつかを念頭に置いた学校支援の取り組みの必要性を提起されたように感じました。

○学校支援を中心とした教育支援の仕組みづくりが必要である。

○地域からの一方通行でなく、双方向の情報交換が必要である。

○子どもたちが、学校という場で地域の多くの人と関わることが学びにつながる。

○子どもも大人も、教育も福祉も共生する大きなフレームづくりが必要である。

○「全ての子どもが居る学校教育の場でどうするか」という大きな・基本的なプランが必要である。

○地域の住民、企業、行政、団体・グループのネットワークを作り、その要となるプラットフォームの役割が大きい。

○こうした取り組みに、学校の教職員の姿が見えてこないという現状がある。

県立国東高校生の21名を含めて120名以上の参加をいただき、今年多くの学び・交流の機会を作ることができました。この学び（活力）をそれぞれの地域に持つて帰つて発展させ、安心できる「我がまち」を作つていただきたいと願っています。

## 実践3：育成事業＊大分大学高等教育開発センターが育成する団体

### 1. NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの役割

#### ～NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの起源～

子どもたちをめぐる様々な課題への対応、将来の地域を担う子どもの育成への期待を受けて、平成18年12月の改正教育基本法の第13条において、これまで言われて続けた「教育の協働」を法律で定めたということの意義は大きいものであると考えています。国は改正教育基本法を受けて、平成20年度から「学校支援地域本部事業」を実施し、その中核となる「コーディネーターの配置」を推進してきました。平成23年度からはコーディネーターを配置する各種事業が一体化された「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」として再構築されるとともに、教育の協働の取り組みに関する文部科学省の顕彰事業も始まりました。こうした事業を通して、一人のコーディネーターによる支援ではなく、組織としてのコーディネート機能の発揮による効果的な支援の事例も紹介されています。

大分県においても、それ以前の平成17年度から県単独事業として、コーディネーターの配置を中心としたモデル的な事業（「地域協育振興モデル事業」）を県内4市で実施していました。こうした事業が「施策」として徐々に定着しつつある中、平成21年度から大分大学高等教育開発センターが、民間の教育力を発揮し、「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進すること、及び「協育」への支援活動を通して大人社会の再構築を推進することを目的とした指導者養成を始めました。地域の指導的立場の方々や実践者を対象に、より高度なコーディネート力（アドバイザーとしての力量）を養成するための研修事業です。さらに、受講生の職場や地域での日常的な活動を支援するとともに、受講生の活動情報を収集・分析し、「協育」コーディネーター育成プログラムの開発や関係者へ提供することによって、本県における「家庭、学校、地域社会の教育の協働」システムの構築に寄与するネットワーク化への歩みが始まりました。指導者養成講座の概要は次の通りです。

#### (1) 内容・時期

- ① (基礎編) 「協育」アドバイザー基礎研修：11月頃実施
- ② (中級編) 「協育」アドバイザー専門研修：基礎編修了者で希望する者を対象に3月頃実施
- ③ (上級編) 「協育」アドバイザー実践研修：基礎編・中級編修了者で希望する者を対象に次年度の9月頃実施

#### (2) 対象者

学校や地域における各種コーディネーター  
各種団体・グループ、NPO等の活動者  
社会教育主事等社会教育関係職員及び指導主事等学校教育関係職員

その他、趣旨に賛同し、職場及び地域等において受講したことを活用できる者 等

#### (3) 修了者のネットワーク化

修了者が、それぞれの職場や地域での日常的な活動を充実するための活動情報の収集・提供、それぞれの活動の情報交換、及び各種研修、モデル事業の実施、県内活動組織のネットワークの促進等を行うために「大分『協育』アドバイザーネット」を組織する。

そして、以下のような経緯を経て、NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットを設立しました。  
< NPO設立に至るまで >

- ・平成20年11月、大分大学高等教育開発センターによる「協育」アドバイザー養成講座開始
- ・平成22年3月、大分県「協育」アドバイザーネット発足、基盤整備に着手
- ・平成23年4月から、具体的な事業活動開始

< NPO設立 >

- ・平成23年9月、NPO申請
- ・平成23年12月、NPO認証および設立登記
- ・平成24年2月5日(日)，設立総会

## ～NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの活動の充実のために～

本NPO法人は、大分大学高等教育開発センター主催の「『協育』アドバイザー養成講座」の開講趣旨、及び大分大学第2期中期計画【37】を受けて、NPO法人として活動することとしています。

基本的には、市民・企業・団体・教育機関などと一層協力しながら「教育の協働」をめざし、その啓発と普及・調査研究・相談支援などに関する事業を行うとともに、県内各地で取り組まれている様々な「協育」実践を交流し合い・深め合い・広め合う事をより一層促進することです。そして、その活動内容を「地域での子どもの体験活動や学校教育への積極的な支援等を通して、未来を創る子どもたちを育てるために、家庭、学校、地域社会の教育の協働を推進するNPOです。子どもに関わることをとおして、大人社会の再構築の推進も行う大分県における「協育」のプラットホームの役割を担います。」として活動を始めることとしました。

### ◆ NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットの立ち位置は？

今、子どもたちに欠けていると言われている

- ・人間関係力の育成（コミュニケーション能力・耐性・礼儀等）
- ・現代的課題である不登校、いじめ、虐待等への対応による健全な育成

などのための取り組みが求められており、その取り組みを通して心身ともに調和のとれた子どもを育成することを目指すものです。活動の柱としては、そのために重要な大人が、そして地域が繋がることの先進的・モデル的な実践していくことが最終的な目的です。

心身ともに健全で、調和のとれた子どもを育成するために、家庭、学校、地域社会はそれぞれが、それぞれの役割を果たして子育て（健全育成）を行ってきましたが、現代社会において以下のような様々な課題が明らかになってきました。

#### ①家庭教育の課題

様々な理由による家庭の教育力の低下や、少子化・核家族化等による家庭教育機能が遅滞してきたと言われています。さらに保護者の多忙化による「心より物・金」という考え方もうかがえます。

#### ②学校教育の課題

子どもの教育に関する過度の学校依存により教職員の多忙化が進んでいます。このことにより、教職員は子どもと向き合う時間が減少しているという大きな課題が明らかになってきました。にも関わらず、基礎学力や運動能力、人間関係力、コミュニケーション能力の育成・向上など広範囲の責任・仕事で疲弊の現状にあります。

#### ③地域社会の課題

地域住民の結びつきだけでなく子どもへの関わりも弱体化し、個が優先する社会になってきました。地域住民が子ども達へ注意・指導することもできにくくなりました。まさに、地域の教育力の低下と崩壊の現状がうかがえます。

以上のような、それぞれの課題は一つ一つも、家庭においても学校においても地域社会においても、それが自分達の役割を果たそうと努力しているという現実があります。しかし、大分県における地域住民及び教職員への意識調査によると、それぞれの教育力を向上させる取り組みの重要性ではなく、「三者が連携、協力する」ことの重要性（教育効果）を認識していることがわかりました。

そこで、NPO法人大分県協育アドバイザーネットとしては次の4点を柱として、家庭、学校、地域社会の連携（教育の協働）の推進という役割を担っていくことを目的としています。

- ①地域にある人的・物的・文化等の教育資源の掘り起こしと整理、及びネットワーク化を進めます。
- ②教育の協働を進める中核としての人材であるコーディネーターの育成や、活動への支援・アドバイスなどを行います。

③地域で行われる子ども達への様々な活動の展開をモデル的に示すことや、人材・プログラム等の情報の提供・発信を行います。

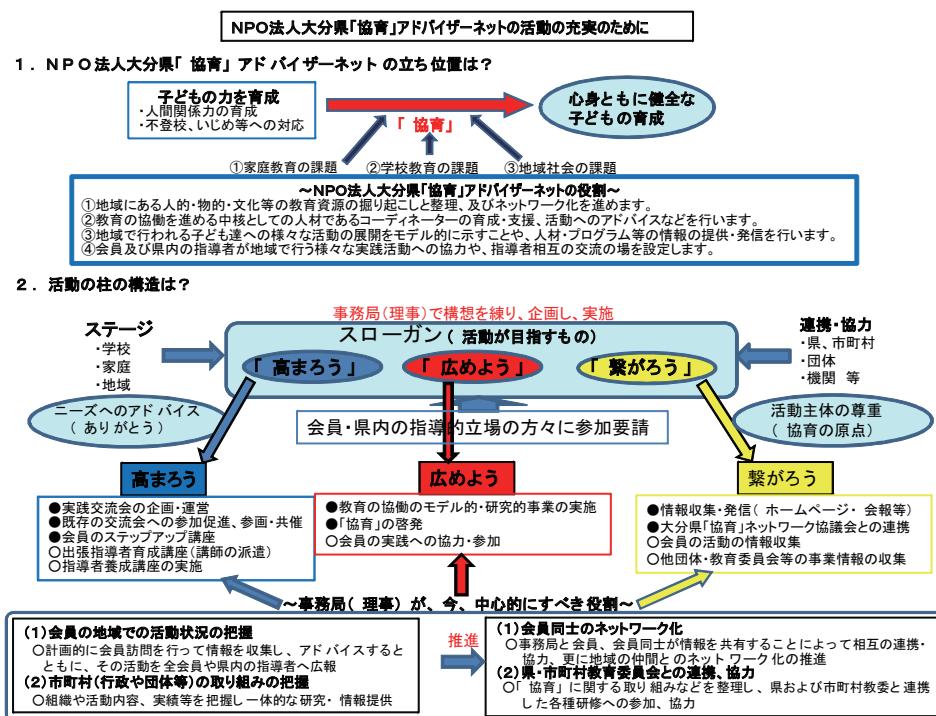
④会員及び県内の指導者が地域で行う様々な活動への協力や指導者相互の交流の場を設定します。

以上のような取り組みは、1つのNPO法人だけでは不可能です。よって私たちは行政、地域の団体等と連携、協働しながら様々な形で情報収集、活動への支援、関係者のネットワーク作りを進めいくことだと考えています。

## ◆ 活動の柱の構造は？

### (1) 活動の基本的な考え方

活動の概要を示したものが以下の図です。NPO法人としての立ち位置（何故、何が求められているのか）、そのための活動の構造（会として何をするか）と事務局の役割（日常的に何をするか）を示しています。以下、詳細に説明することとします。



活動の柱は、「教育の協働」のために①高まろう、②広めよう、③繋がろうの3つです。このことを推進するために、

①理事で構成する事務局で構想を練り、企画し、実施する活動と会員への活動支援を行います。

②それらの活動に会員の方々を中心に、県内の多くの指導的立場の方々に参加していただくことを進めなければなりません。活動主体が会員の場合は、「ニーズへのアドバイス」が活動の基本です。

次に重要なことは、

①活動のステージは学校であり、地域社会であり、家庭教育の場であるということです。

②もう1つ重要なのが、県・市町村、団体事業等の実践者との連携・協力です。

③更に、こうした取り組みの調査研究や指導者育成を行う大学等との協働が大切です。

### (2) 活動内容

活動の3つの柱である「高まろう」「広めよう」「繋がろう」について、以下のような内容を考えています。

#### 1) 「高まろう」について

「高まろう」においては、指導者の意識を高めるための養成研修・講座や指導者相互の交流・情報交

換を行うものです。柱としては以下の4点です。

①現段階で実施するもの（一部実施しているもの）

○実践交流会の企画・運営

私たちの手作りの「ゆったり交流」をイメージした交流会を行います。その内容は、仲間の交流や各自の活動の交流を行うものです。

○既存の実践交流会への参加促進、参画・共催

これまで行ってきた梅園の里でのデザイン実践交流会や、実践事例集での相互の活動事例の紹介などを積極的に推進します。

○会員のステップアップ講座

会員の研修のフォローとして大分大学高等教育開発センターが実施する「協育」アドバイザー養成講座や「協育」見本市、県外で行われる研修などを紹介し、参加を奨励します。

②今後実施するもの

○出張指導者育成講座（講師の派遣）

市町村や団体、グループ等の教育の協働に関する研修会・交流会・イベント等に会員を積極的に派遣します。

○指導者養成講座の実施

教育の協働を進めるための指導者やコーディネーターを育成するために、モデル的に実施した事業や会員が地域で行っている取り組み等を基本にした研修会を開催します。

## 2) 「広めよう」について

「広めよう」においては、教育の協働を広めるための実践的な取り組みをモデル的・研究的におこなうとともに、指導者などへの直接的なアドバイスをするものです。柱としては以下の3点です。

①現段階で実施するもの（一部実施しているもの）

○教育の協働に関するモデル的・研究的事業の実施

研修会・実践交流・講師派遣等の事業や実践事例集での資料の提供などを行うために、県や市町村、企業などが行う委託事業を受託した取り組みを行います。この取り組みは会員の協力により様々なカリキュラムを作り出すことに大きな意義があります。さらに、そのことによる地域の様々な人材とのネットワーク化の方策も提案することができます。

○「協育」の啓発

「協育」見本市や実践事例集などを活用して、教育の協働を啓発する取り組みを行います。

②今後充実するもの

○会員の実践への協力・参加

県内各地で活動する会員の事業や活動への直接的な協力・参加や、ホームページや会報を活用して案内するとともに、参加、支援の要請などを行います。

## 3) 「繋がろう」について

「繋がろう」においては、ネットワークを広げるために会員及び県・市町村、団体・グループ、企業などが行う様々な活動の情報を収集し、発信するものです。柱としては以下の3点です。

①現段階で実施するもの（一部実施しているもの）

○情報収集・発信

以下の広報媒体によって情報を積極的に収集し、日常的・定期的に発信します。

・ホームページ 大分県「協育」アドバイザーネットや大分県「協育」ポータル

・会報 「協育」ニュース ・パンフレットやリーフレット ・「協育」事例集

○大分県「協育」ネットワーク協議会との連携

県内の教育の協働の取り組みをする機関、企業、団体・グループ等で組織する大分県「協育」ネットワーク協議会を支援し、ネットワークを広げていきます。

## ②今後充実するもの

### ○会員の活動の情報収集

県内各地で活動する会員の活動を把握して発信するために、会員の情報収集活動を行います。

### ○他団体・教育委員会等の各種事業情報の収集

教育の協働を進める県内各地のイベントや研修などの情報を広く収集・広報します。併せて、地域の行政や他の団体・グループなどとのネットワークを広げます。

## ◆ 事務局（理事）は何をすべき？

こうした取り組みを行うためには、計画的な「ニーズと実践の掘り起こし」の取り組みが必要です。県内におけるニーズ、取り組みを整理・蓄積することによって本NPO法人が何をすべきか、何を望まれるのかが見えてくると考えます。そこで、事務局（理事）としては、長期的な視野に立って、年間計画を基にした具体的・日常的な以下のような取り組みにをおこなうことにより、本NPO法人の基盤づくりができると考えます。

### (1) 会員の地域での活動状況の把握

本会NPO法人の会員はそれぞれの立場で様々な活動をしています。会員は、自らの活動を充実するために、日常的なネットワークを作るという思いで参加しています。よって、会員の活動内容・方法・工夫・課題などの情報を取材することが求められます。そこで、事務局として計画的に会員訪問を行いその情報の収集やアドバイスとともに、会員や県内の指導者へ広報していく取り組みを行います。

### (2) 県・市町村（行政や団体等）の取り組みの把握

県内の全ての市町村、教育行政においては学校支援と放課後活動支援を中心とした教育支援の取り組みを行っています。さらに、各種団体等も様々な活動をおこなっています。その組織や活動内容、実績等を把握して一体的に研究・情報提供をすることが求められているため、関係機関と連携して情報収集・研究・発信していきます。

こうした計画的な取り組みを通して次の2点を推進していきます。

### ①会員同士のネットワーク化

事務局と会員の連携に止まらず、会員が情報を共有することによって会員同士が連携、協力して活動を充実することを目指します。さらに、地域の仲間とのネットワーク化や活動の協働等も支援していきます。

### ②県・市町村教育委員会との連携、協力

県および市町村の取り組み情報や県内各地で行われている教育の協働に関する取り組みなどを一括的に整理し、県および市町村教育委員会と連携した各種研修への連携、協力を進めています。

NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットは、県内の機関、企業、団体・グループを繋いで、家庭、学校、地域社会を繋ぐためのモデル的・先導的な取り組みを目指しています。多くの関係者の理解をいただくことが重要であり、それぞれの活動への情報提供や活動への協力をしつつ、教育の協働を進めるコーディネーターとしての先導的活動をすることが本会の役割であると考えています。

## 2. 大分県『協育』ネットワーク協議会が目指すもの

### 〈設立の経緯と趣旨〉

近年の子どもたちに関する様々な課題は、「対処療法的取り組み」では解決しない多くの複雑な要素が絡み合っていることが指摘されています。しかし、家庭や地域社会での教育機能の低下、学校教育活動の肥大化など、これまでのように、三者がバランスを取りながら、それぞれの教育機能を果たすことが困難になっています。こうした現状を踏まえて、平成18年に改正された教育基本法の第13条に、「それぞれの教育機能の発揮と連携・協力」の項が新設されたことから、地域社会における「教育の協働システム」を構築することが喫緊の課題であり、そうした関係者のネットワーク化が急務とされています。さらに、家庭や地域での子育てを支援する活動や、高齢者が子どもと関わりながら「生涯現役」を創りだす活動など、地域社会総参加での子育てのまちづくりが求められています。

本県においては、学校はもとより、各種機関、団体・グループ、企業等において、こうした現実を踏まえながら、様々な取り組みをとおした地域づくりが進められています。

こうした中、平成18年度に大分県教育委員会が策定した「地域『協育』振興プラン」において「教育の協働」（以下、「協育」という。）による効果的な教育活動を日常的に実践する重要性とその方策が示され、「学校支援地域本部事業」などを実施することをおして、地域住民のネットワーク化や高齢者の生き甲斐づくり等の取り組みが進められてきました。

一方、大分大学高等教育開発センターにおいては、平成21年度から「教育の協働」のキーマンとなるコーディネーターの育成を開始するとともに、今後の生涯学習・社会教育を推進するためのネットワーク化（体制整備）に関する方針を策定し、「今後、関係機関や団体・組織等とのネットワークを構築し、学びの更なる充実と住民自らの地域貢献を支援するための体制づくりを推進する。」としました。

こうした動向を受けて、平成23年12月18日に、「大分県『協育』ネットワーク協議会」を設立し、協議会の目的の実現に向けて、「情報の共有」及び「地域での総合的・効果的・日常的・継続的な活動の相互支援」、さらに「『協育』の啓発」に取り組むこととしました。



### 大分県「協育」ネットワーク協議会役員

会長	大分大学高等教育開発センター代表者	教授 中川 忠宣
副会長	東国東地域デザイン会議代表者	会長 林 浩昭
副会長	株式会社 翼代表者	代表取締役 麻生 雅憲
監事	学校法人 淑野学園 富士見が丘幼稚園代表者	園長 淑野二三世
監事	大分県中小企業家同友会代表者	事務局長 戸田 宏
事務局長	NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット副理事長	加藤 俊一

※会則や事業等の詳細、会員募集等の情報は、大分県『協育』ネットワーク協議会のホームページに掲載しています。

大分県「協育」ネットワーク協議会員名簿 (平成25年3月1日現在)

番号	会員名称	所属長名	代表者名	所在地
001	大分大学高等教育開発センター	センター長 山下 茂	教授 中川 忠宣	大分市
002	大分県中小企業家同友会	代表理事 木下 光一 代表理事 岩尾 達也	事務局長 戸田 宏	大分市
003	東国東地域デザイン会議	会長 林 浩昭	会長 林 浩昭	国東市
004	NPO法人ふれあい囲碁ネットワーク大分	代表 谷川真奈美	代表 谷川真奈美	大分市
005	NPO法人こどもサポート「にっこ・にこ」	理事長 江無田哲生	理事長 江無田哲生	杵築市
006	九重ふるさと自然学校 (一般財団法人セブンイレブン記念財団)	理事長 山本 憲司	リーダー 川野 智美	九重町
007	学校法人渕野学園 富士見が丘幼稚園	理事長 渕野二三世	理事長 渕野二三世	大分市
008	大分県生涯教育学会	会長 岩佐 紀雄	会長 岩佐 紀雄	国東市
009	明日を見つめる'あき21	会長 是永 章三	会長 是永 章三	国東市
010	NPO法人えにしネット21	理事長 松吉 鈴美	理事長 松吉 鈴美	国東市
011	あきツーリズム研究会	会長 中野 昭純	会長 中野 昭純	国東市
012	NPO法人923みんなんクラブ	理事長 丸山 順道	理事長 丸山 順道	国東市
013	NPO法人大分県「協育」アドバイザーネット	理事長 園部 秀靖	理事長 園部 秀靖	大分市
014	イオン九州株式会社イオンパークプレイス大分店	店長 岩本 賢治	店長 岩本 賢治	大分市
015	うーたの会	会長 神宮司昭夫	会長 神宮司昭夫	大分市
016	プラス・エコ	代表 桑野 恭子	代表 桑野 恭子	大分市
017	つくみ環境美化グループ	会長 重松 貞	児玉 磨代	津久見市
018	佐賀関観光ボランティアガイド協会	会長 越 美智子	会長 越 美智子	大分市
019	株式会社 翼	代表取締役 麻生 雅憲	代表取締役 麻生 雅憲	別府市
020	大分県生活学校運動推進協議会	会長 小野ひさえ	会長 小野ひさえ	大分市
021	国東市くにみグリーンツーリズム研究会	会長 田中 友昭	会長 田中 友昭	国東市
022	株式会社 デンケン	代表取締役 石井 源太	代表取締役 石井 源太	由布市
023	NPO法人大分環境カウンセラー協会	理事長 羽生 正宗	理事 須股 博信	大分市
024	有限会社 いこいの村くにさき梅園の里	代表取締役 岡田 雄治	代表取締役 岡田 雄治	国東市
025	NPO法人エー・ビー・シー野外教育センター	代表理事 藤谷 将誉	代表理事 藤谷 将誉	杵築市
026	大分キワニスクラブ	会長 渕野二三世	会長 渕野二三世	大分市
027	NPO法人地域創造ネットワーク	理事長 田河慎次郎	理事長 田河慎次郎	別府市
028	株式会社パークプレイス大分	代表取締役 橋口 和夫	企画開発マネージャー 元兼 政樹	大分市
029	番匠川流域ネットワーク	会長 真柴 茂彦	会長 真柴 茂彦	佐伯市
030	株式会社 地域科学研究所	代表取締役 木下 光一	代表取締役 木下 光一	大分市
031	ウミネコの会	会長 浜田 一生	会長 浜田 一生	大分市
032	NPO法人 共に生きる	理事長 江藤 裕子	理事長 江藤 裕子	大分市
033	大分県生涯学習インストラクチャーの会	会長 小野 忠士	会長 小野 忠士	大分市
034	NPO法人総合学習研究所	理事長 木下 和子	理事長 木下 和子	大分市
035	ザ・キャビンカンパニー	代表 阿部健太郎	代表 阿部健太郎	由布市
036	アースディ中津	代表 須賀 要子	代表 須賀 要子	中津市
037	NPO法人子育て教育支援機構	理事 託間 陽史	理事 託間 陽史	臼杵町
038	NPO法人AmaRi	代表 衛藤めぐみ	代表 衛藤めぐみ	宇佐市
039	紙芝居文化の会大分支部	支部長 千竈八重子	支部長 千竈八重子	由布市
040	株式会社プラン・プラン	代表取締役 河野 葉子	代表取締役 河野 葉子	大分市

〈大分大学高等教育開発センターと大分県「協育」ネットワーク協議会の共催〉  
～「協育」見本市～ワールドカフェの概要～

## 1. 趣旨

子どもの様々な体験、文化の伝承、生きたキャリア教育、多くの人の交流等は単独機関・団体だけでは担いきません。ましてや、地域にはどんな教育資源があり、教育現場が何を求めているのかなど、基本的な事項の共通認識が無ければ一步前へ進めません。この見本市は、需用者の願いを聞きつつ、供給する教育資源が需要者に対して自らの活動を提示して、提供内容やサービスなどをパンフや実物で紹介、あるいはデモンストレーションして、子どもを育てるプログラムを広げることを目的としています。

ワールドカフェでは、参加者（教員やN P O、地域指導者等）6名程度が同じテーブルについて、ニーズとシーズを語り合う中で様々なプログラムを広げていくもので、数クールする中でそのプログラムの広がりと、人のつながりの広がりを作っていくことが目的です。

## 2. テーマ：「学校（がっこう）」を「楽校（がっこう）」へ

考え方：ワールドカフェの狙いは、「学校（がっこう）」を合校（がっこう）に！。そして、楽校（がっこう）へ！」ですが、「学校」を「楽校」にするアイディアを出し合えば、その途中の「合校」という発想がでてくると考えています。

内 容：様々な課題がある中で子どもたちは学校という多くの仲間・先生の中で学び、生活している。学校が楽しい」ということが、子どもの学び・成長と大きな関係があることが本センターの調査でも明らかになりました。そこで、それぞれの立場から「学校（がっこう）」を「楽校（がっこう）」へという本テーマについてアイディアをだして花を咲かせるためのワールドカフェを行います。

### 「協育」見本市～ワールドカフェ～の開店（13：30～）

テーマ 「学校（がっこう）」を合校（がっこう）に！そして、楽校（がっこう）へ！」

主 催 大分大学高等教育開発センター 大分県「協育」ネットワーク協議会

協 力 N P O法人大分県「協育」アドバイザーネット 大分県立社会教育総合センター

日 時 2012年11月23日（金）13:30～16:30

場 所 大分県立社会教育総合センター（別府市）

カフェマネージャーの進行（生重）

#### オープニングセッション

1. 林店長の挨拶（大分県「協育」ネットワーク協議会副会長）
2. ワールドカフェでの話題の提供（10分程度：中川）
3. 杉並第一小学校の取り組みからの話題提供（10分程度：伴野）

\*参加者：大学生4名、行政職員、団体・N P O関係者37名 その他5 計46名

#### (1) 交流タイム（13：50～）

1クール：それぞれの立場から、今の「学校」を「楽校」にするためにして欲しいこと、自分が（地域が）できること等を気軽に出し合う。

- ①それを、聞きながら目の前の模造紙にメモする
- ②テーブルコーディネーターはキーワードで整理しておく。

2クール：1クールで出された内容を報告して、それへの意見や追加、答えを出し合う



\* 热心に意見交換する参加者

- ①テーブルコーディネーターはキーワードで説明する。
- ②それを、聞きながら目の前の模造紙のメモを見ながら、各自が意見・事例等を話す。
- ③それを、聞きながらそのメモの横にメモする。
- ④テーブルコーディネーターはキーワードで整理しておく。

3クール：1クールの席に戻って、最初の課題や想いにどんな色やアイディアがくついたかを整理して、最終的な花を咲かせる

- ①テーブルコーディネーターは、2クールの内容をキーワードで説明する。
- ②2クールでいただいた意見・考え方について、各自が「いいとこ探し」や「付加内容の意見」を出し合う。
- ③このテーブルの1クールでの課題について、どんな花を咲かせようとしているかをキーワードでまとめる。

## (2) 発表タイム (15:50~16:30)

班の代表2人が、2つに分かれて木の前に立って、相談しながらグルーピングして貼る

- ①「何をする！」のキーワード  
：「ハードを開くと共にハートを開く」「テーマパークをつくる」などの取り組みが紹介された。
- ②「誰が、いつ、どこで、どんな方法で！」  
：「地域で出来ることを整理して、情報の共有や情報発信の必要性」「子どもと同じ視線から見守る」などが紹介された。

### 【出てきた思い】

- ・放課後や休日に、学校で自由に遊べるプログラムを企画する
  - ・学校行事に地域の人が参加できるプログラムへの移行が大切！（運動会・遠足・バザー等）
  - ・まず、親が地域と繋がることにより、地域の方が子どもに感心を持ち、自然と背中が見えてくるのではないだろうか。
- ③小見出し付け  
カフェマネージャーの進行で見出しを付けながら、最後のまとめをした。



まとめ（学生の感想から）

○A学生

教育関係者の方から地域の保護者の方、我々学生までといった幅広い年齢層の現在の教育について関

心を持った人たちが集まり、どうすれば現在の教育が子供達にとってよりよいものとなっていくだろうか、ということを1つのテーブルに6～7人程度で意見交換を行い、それをもとに討論して会話を広げていくというものであった。「ワールド・カフェ」とは会議など緊張感のある空間での会話よりも、カフェや喫茶店などのありふれた空間での会話討論の方が、話し手がリラックスした状態で意見を引き出すことができるため、よりよい意見や緊張感のある場面では考えつかない独創的な発想・アイディアが生まれるのではないかという考え方の下に考案されたシステムである。個人的な経験を通してみても、会議という緊張感のある場面ではその場に見合った意見を提示することが求められることが多いため、よりよい意見は出にくいと考えられる。それに対して、「ワールド・カフェ」というシステムでは雑談のような感覚での会話討論のため、気楽に楽しみながら意見交換ができる。また、雑談という会話形式であっても、それぞれの話し手の経験を基にしているため説得力もあり、考えさせられる場面も生まれる。

いくつかワールド・カフェにはルール（エチケット）があって、「問い合わせ」に意識を集中して積極的に話し合いに参加しようとする姿勢をもつこと、あくまでも「討議する」と捉えず、「対話をする（他人の考えをよく聞き、自分の考えも伝えよう）」という心持しが重要であること、などである。

#### ○B学生

私は、ランダムに職種や立場の違う人たちが1つのテーブルに着き、それぞれの視点から考えていくという、ワールド・カフェの仕組みがとても勉強になった。時間いっぱい話し合った後に、違うテーブルに着き、再度話し合うことによって、自分とは違う視点の考えに出会うことが多く、問い合わせに対する考えが深まっていくのを感じたからだ。

次に、テーブルに集まるメンバーに引き継ぎを行うことが勉強になった。また一から話し合いを構築していくのではなく、連続して繋がった話し合いをしているのだと感じることができた。問い合わせに対して各々が発信した考えの情報をまとめることは、難しいことでもあったが重要だと思った。まとめることは、各々の意見の共通する部分を見つけることで、なるべくコンパクトで濃い情報にし、分かりやすく次に引き継ぐことであった。そうすることで、話し合いにスムーズに入ることができ、参加できる環境が築かれるとともに、より多様で密な話し合いに繋がっていました。テーブルは違えど、どのテーブルでも1つの問い合わせについて皆で考えているということを感じた。

### 3. 情報プラットホーム「大分県『協育』ポータル」からの発信

大分大学高等教育開発センターが進めている「協育の協働」の取り組みは、大分県教育委員会の方針と並行した、具体的な県レベルでのネットワーク化の推進です。コーディネート機能を発揮・支援する「NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット」を中心にして、情報の収集・提供と活動の協働を目指す「大分県『協育』ネットワーク協議会」、さらに、その両者が協働した様々な啓発活動を日常的・継続的に進めていくことが大切だと考えています。地域レベルでの取り組みを支援し、推進するため、そのモデルや活動情報を全県レベルで収集し、提供することを目指しています。そのための人材・組織とのネットワーク化を進め、様々な情報を提供していくために、ホームページ上での《情報プラットホーム》「大分県『協育』ポータル」を運営しています。全国の「協育」情報、県内の供給情報（事業・行事情報）と需要情報（求める情報）を一体的にホームページ上でマッチングする試みです。組織としての情報を提供し「協育」を推進する「NPO法人大分県『協育』アドバイザーネット」や活動のネットワークを目指した「大分県『協育』ネットワーク協議会」のホームページ、大分大学高等教育開発センターのホームページと連動しながら運用しています。さらに、県内の様々なホームページとリンクするなどして、新しい情報提供システムのポータルを構築し、大分県における情報提供のプラットホーム機能の充実をめざしています。

#### 情報プラットホーム\*繋がろう！「私たち」\*創ろう！「私たちのまち」

近年の青少年に関する様々な課題に対応するため、大分県における「教育の協働」(以下「協育」という。)の推進し、情報の共有と「協育」活動の啓発等を行い、社会における体系的・効果的・日常的・継続的な教育支援活動を行う各種組織のネットワーク化を図ります。

平成18年12月：改正教育基本法(国)  
第13条 学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力

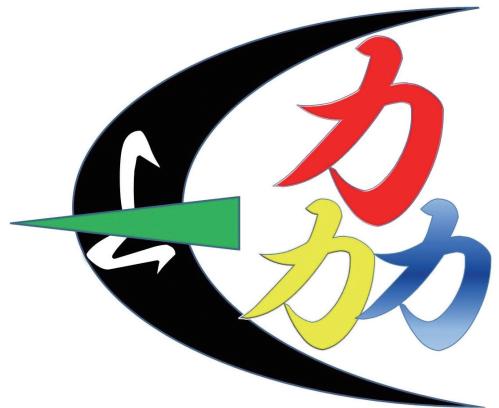
平成19年2月「地域協育振興プラン」(大分県教育委員会)  
～教育の協働を体系的・効果的・日常的・継続的に推進～



## \* \* 資 料 \* \*

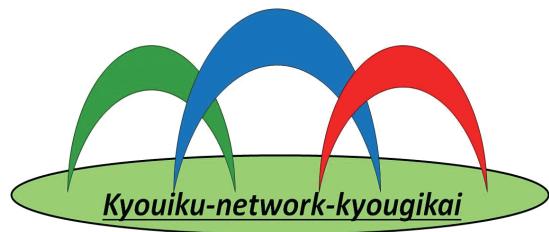
### ☆NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットロゴマーク

- ①ロゴマークは、中央の三日月を正方形として全体構成し、3つの「力」は月の中に、重ならずにつり合いを保ちつつ配置されています。
- ②「力」は学校・家庭・地域社会を意味しており、上の「力」は少し大きく、現在の学校教育の重要性を示し、下の家庭と地域社会が支援・協力して（「三日月とベクトル」の十は3つの力のプラス〈合わせる〉を表す）子どもを「育」（月〈三日月〉を表す）むことを表しています。
- ③赤・青・黄・緑は光・色の3原色であり、うまく配合されることによって生まれる白（光）と黒（色）を意味し、様々な彩りをつくる可能性を示しています。



### ☆大分県「協育」ネットワーク協議会ロゴマーク

- ①大分大学旦野原キャンパスから別府方面を望むと、全ての子どもたちを芽生えさせる役割を担う各種機関を象徴する新緑の由布岳（春）、子どもたちをしっかり地域に繁茂させる学びの場として地域の団体・グループを象徴する青々と茂る鶴見山（夏）、紅葉で染まる高崎山（秋）は最終的に輝く社会人を育てる企業を象徴しています。
- ②この3山の連なりと、県鳥であるメジロ（ウグイス色）が3山に広く生息している様子を図案化したものです。
- ③この3連山のように繋がって、大分県の発展のために教育の協働を推進していく私たちの協議会の方向性を示しています。



### ☆HP「大分県『協育』ポータル」ロゴマーク

- ①NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットのロゴマークと大分県「協育」ネットワーク協議会のロゴマークを合わせたマークで、「協育」を推進するために、様々な機関・企業、団体・グループ等の「ネットワーク（繋がる）」によって子ども育ての街づくりを進める情報提供を行うポータルとしての役割を担うものです。



- ②NPO法人大分県「協育」アドバイザーネットが事務局となって、大分県「協育」ネットワーク協議会を中心としたネットワークの広がりを推進していくための「情報の収集・提供」の役割を果たしていきます。



☆「協育」事例集☆  
教育の創造～地域「協育」のススメ（第2巻）～

発行 平成25年3月

大分大学高等教育開発センター  
〒870-1192 大分市大字旦野原700番地  
Tel/Fax(097)554-8509  
<http://www.he.oita-u.ac.jp>